

植野武雄とその東洋学

— 附・著述目録

吾妻重二

はじめに

日本近代における中国史研究が前近代と大きく違うことの一つは、研究の領域が拡大し、広範な視野のもとに諸事象が論じられるようになったことである。江戸時代まで「漢学」という閉じられた枠組みの中で捉えられていた対象が広い歴史地理的空間のもとに解放され、「東洋史」や「満鮮史」あるいは「滿蒙史」といった分野が登場するのである。そして、このような研究対象の拡大が日本の大陸進出とそれにもなうアジアとの直接的接触を背景としていたことは、改めていうまでもない。

日本をとり囲む国際環境が変わることにより、学問の範囲や対象が変化し拡大していったのである。明治中期以降、日清・日露戦争、朝鮮併合、第一次世界大戦、日中戦争などを経て、「日本史」「支那史」「万国史」といった便宜的な学科分類から「東洋史」

や「満鮮史」「滿蒙史」「亜細亜史」などの領域が成立してくるわけ^①で、そのことはすでに学術史的整理の中で指摘されているところである。

学問の展開が時局とかかわっていることは当然といえば当然なのだが、近代日本の学知におけるそうした時局との関係は、かつての研究者の証言によっても確かめることができる。いま、一つだけ例を挙げてみよう。

戦前、京都の東方文化研究所（現在の京都大学人文科学研究所の前身）が『東洋史研究文献類目』という、東洋史全般に関する研究論文・著書目録を刊行していた。これは戦後、『東洋学文献類目』と名称を改めて我々を裨益してきたビブリオグラフィであるが、この『東洋史研究文献類目』がなぜ昭和十五・六年度、および昭和十七・八年度の二期に限って、目録のみならず、学界展望として関連動向の説明を載せたことがある。

そのうち「昭和十五、六年度の東洋史学界」の「概観」および「一般史」の説明を見ると次のようにある。執筆者は小川茂樹（のちの貝塚茂樹）である。

事変が東洋史学に与えた影響としては二つの方面が考へられる。第一には支那に対する関心の増大或は切実化が支那史に齎した変化である。明治以来長い間忘れられてゐた隣国支那に対する関心は支那事変を契機として始めて我が国民の間に喚び起されたのである……この支那に対する国民の関心の増大に应ずべく、出版界は驚くべき多数の支那を主題とする書籍を読書人に送り出し、十五・六年両年度に至つてはその頂点に達したかの感がある。……

要するに支那事変を契機として自覚せられた大東亜共栄圏の理念に従つて東洋史から亜細亜史、東亜史への書換へが試みられた。これが支那事変の東洋史学に与えた影響の一つであったのである。⁽²⁾

ここにいう「事変」とは昭和十二年（一九三七）七月に起こつたいわゆる支那事変、すなわち盧溝橋事件とそれに続く戦乱をいひ、それをきっかけに中国への関心がかつてなく高まつたことでも、おびただしい関連書籍が刊行されたという。またこれにもなう「大東亜共栄圏」の提唱により「東洋史」から「亜細亜史」、「東亜史」への書き換えが試みられることになつたともいふ。ここで中国への関心が「明治以来長い間忘れられてきた」といふのは事実

とはやや違ふが、ともあれこの時期、学問研究の関心がアジアへと急速に拡大したのが日中戦争や「大東亜共栄圏」のありようとも密接な関係があることがよくわかるのである。

一方、このような事情から、この時期に行なわれたアジア研究は日本の軍事的・政治的・経済的な大陸侵略に奉仕していたという見方も存在する。確かにそのような傾向は否定できないし、時局に便乗した軽薄な出版物が多く現われたことも事実であろう。「満鮮史」や「満蒙史」の枠組みに問題があることも指摘されている。しかし、これらの研究の意図がみな侵略を正当化するためのものであったとか、そのために事実を大きくねじ曲げていたというわけでもあるまい。ナシヨナリズムやエスニズム、イデオロギーは誰しも免れえないとしても、彼らの残した研究が一定の実証性や説得性をもつことも事実だからである。しかもその研究がいわゆる一國主義にとどまらない「幅広さ」を持つことは、現在、タコソボ化しがちな我々研究者に一定の示唆を与えてくれるものでもある。そのことについては、たとえば白鳥庫吉や内藤湖南、藤田豊八、桑原隲蔵、藤塚鄰、石濱純太郎らの名を想起すればよいであろう。⁽³⁾

前置きが長くなつたが、ここに取り上げる植野武雄（一八九七—一九四九）もまた、そのような幅の広さを持つ研究者であつた。これまで植野を紹介した論考はまったくなく、時折りその貢献について触れられる程度であつたが、その主な理由は伝記資料が

ほとんど見出せなかったためと思われる。

筆者は近年、大阪の漢学塾・泊園書院を調査する中で植野の存在を知るようになった。植野の父で陸軍中將となった徳太郎が泊園書院の有力な門人であり、その伝記を調べるうちに武雄の存在に気づいたのである。^④武雄もまた泊園書院で学んだ一人であることがわかった。

関西大学は泊園書院と縁が深いことから、関西大学東西学術研究所には植野徳太郎の詳細な自伝『木州自叙伝』（自筆、私家版、一九六六年）が蔵されており、ここには武雄に関する事項も多く記されている。このほか、九歳年上の石濱純太郎（一八八八—一九六八）による追悼文「竹城植野武雄先生」（『関西大学学報』第二三三号、一九五〇年、関西大学学報局）もある。これらは外部にはまず知られていなかった資料であり、これらを用いることで武雄の経歴をたどることができるとし、さらに筆者が最近集めた著書・論文とあわせて、ここにその生涯と学問につき述べてみたいと思うのである。

なお、伝記の基本資料としてはいま述べた植野徳太郎『木州自叙伝』と石濱による略伝「竹城植野武雄先生」、および満蒙資料協会が一九三七年に出版した中西利八編纂『昭和十二年版 満洲紳士録』（日本人物情報大系第十三巻、皓星社、一九九九年影印）を用い、それ以外の資料を用いる場合には注記を加えることとする。またこのうち石濱「竹城植野武雄先生」は重要資料であることか

ら、全文を最後に再録することとする。

また附録の著述目録には、著書・論文から零細な文章まで、かなりの点数を可能な限り原文にあたったうえで載せた。これが植野の著述のすべてとはいわないが、ほぼ網羅することができたのではないかと思われる。

一生 涯 その1——前半生

1 父・植野徳太郎について

植野武雄（号は竹城）は明治三十年（一八九七）一月一日、愛媛県名古屋市榎木町に植野徳太郎の長男として生まれた。本籍は和歌山市湊二八六だが、名古屋で生まれたのはこの時、徳太郎が騎兵第三大隊第一中隊第四小隊の小隊長として名古屋に居住していたためである。

父・徳太郎は明治二年（一八六九）八月、和歌山城東に生まれた。^⑤地元の小学校および立教学校に通い成績抜群、学業の余暇に『論語』『孟子』の素読や漢文を習うほか、田辺藩の儒者・浅井篤（南溟）からも漢学を学んでいる。浅井は、のち京都帝国大学教授として日本における地質学・歴史地理学のパイオニアとなった小川琢治の父である。^⑥

明治十八年（一八八五）四月、十七歳になった徳太郎は大阪に出て泊園書院に入塾し、藤澤南岳に修身・経世・詩文を含む漢文を学ぶとともに英語を私立東雲学校に学んだ。成績はこれまた優

秀で、明治二十年（一八八七）一月には泊園書院北樓の房長となつた。同年七月、二年あまり通つた泊園書院を退塾し帰郷したあと、今度は明治二十三年（一八九〇）、東京の陸軍士官学校（第三期）に入校する。兵科は騎兵であつた。その後、徳太郎は日本軍騎兵隊の将校として活躍することになる。

ところで日本近代における騎兵隊といへば、想起されるのは「日本騎兵の父」といわれる秋山好古（一八五九—一九三〇）であろう。

秋山のことは司馬遼太郎の歴史小説『坂の上の雲』によつて人口に膾炙するとおりで、実際、徳太郎の履歴は十歳年上の秋山とよく似たところがある。四国の伊予松山藩（現・愛媛県松山市）出身の秋山は地元の私塾で漢学を学んだあと、小学校教員になるため大阪に出て師範学校に通い、卒業後、名古屋師範学校附属小学校教諭として赴任したが、まもなく明治十年（一八七七）に陸軍士官学校（旧制三期）に入校している。陸軍士官学校の兵科は騎兵である。⁷秋山の師範学校および陸軍士官学校の入試科目はもっぱら漢文だつたようで、つまり漢学の知識を身につけていたこと、繁都大阪に出て就学したこと、学者志望から軍人、それも騎兵へと転身し将校となつたことなどが徳太郎と共通しているのがある。二人はその後、軍歴を重ねるうちに接する機会も多かつたらしく、明治二十五年（一八九三）七月、徳太郎は陸軍士官学校卒業の際、当時騎兵大尉だつた秋山の指導のもとに御前講演案を草したという。また大正七年（一九一八）、すでに大将となつてい

た秋山が陸軍省馬政局および軍馬補充部臨時検閲官として全国の軍馬補充状況を検閲した時、当時少将だつた徳太郎を属員として実施にあたつて⁸いる。

ここでわざわざ秋山好古のことに触れたのは、徳太郎の生きた時代の雰囲気や価値観というものが多少なりとも伝わると思ふからである。

さて、徳太郎は陸軍士官学校卒業後、見習士官となつて名古屋の騎兵第三大隊第一中隊に転入し、ついで騎兵少尉として日清戦争に出征する。明治二十八年（一八九五）に名古屋に凱旋したあと同郷の飯田敬明の長女、民と結婚、その二年後に武雄が生まれたのである。

徳太郎はその後、東京の陸軍大学校（第十三期）を卒業して名古屋騎兵第三聯隊中隊長、ついで陸軍大学校教官、同兵学教官となり、陸軍軍医学校教官を兼ねた。さらに陸軍騎兵少佐・熊本第六師団参謀として日露戦争に出征し戦果をあげる。とりわけ日露あわせて五十六万の大軍が激突した陸上での最後の会戦、いわゆる奉天会戦に参加し、明治三十八年（一九〇五）三月十日ついに奉天（現・瀋陽市）を占領した。この「奉天占領」の捷報を軍司令部に打電したのが徳太郎であり、その電文は大本営を通じて日本各地に新聞号外をもって伝えられた。このことを子の武雄は後々まで誇りとして⁹いる。

徳太郎はその後、騎兵第三連隊長、陸軍騎兵実施学校長、騎兵

第三旅団長、軍馬補充部部長などの要職を歴任し、陸軍少将を経て大正十年（一九二一）に陸軍中將となった。

この間、泊園書院ともたえず関係を保っており、陸軍軍医学校教官時代には、藤澤南岳の三男でのち軍医となった三崎麟之助を教育している¹⁰。さらに明治四十四年（一九一一）二月、南岳の長子の黄鵠が衆議院議員として起こした、かの「南北朝正閏問題」事案のさなかには、大阪から上京する途中名古屋に立ち寄った黄鵠に会って事態の收拾にあたつたらしい¹¹。この時、徳太郎は騎兵第三連隊長として名古屋にいたのである。そして昭和二十五年（一九五〇）に死去するまで、泊園同窓会に参加し、新聞「泊園」にしばしば漢詩を寄せるなど泊園書院の有力な門人であり続けた¹²。このほか、徳太郎は武雄の編集による漢詩集『木州詩存』も残しており、職業軍人でありながら漢学にも造詣の深い人物として知られていた（後述）。

2 植野武雄の修学時代

さて、長男の武雄に話を戻せば、武雄は東京の成城中学校を卒業後、眼疾のため志望を「武」から「文」へと移し、大正六年（一九一七）秋、東京帝国大学文学部・支那文学科の選科生となる。在学中は中国文学の塩谷温、日本漢学の岡田正之から指導を受け、大正九年（一九二〇）二月に選科を修了した¹³。卒業論文は「菅詩の研究」すなわち菅原道真の漢詩を論じるものであった。とりわ

け岡田正之（一八六四―一九二七）の講義には感銘を受けたらしい、のちに岡田の追悼文において武雄は、

私が学窓を出づるに際し平安漢詩中の代表的人物なる菅公の詩を読みこれと関係深き唐詩中の白楽天の詩との比較を試みたる一文を書きたる如きも一に先生の御講義に感激したりしがためであつたのである。

と回顧している¹⁴。

このほか石濱は「竹城植野武雄先生」において、卒業論文は「菅詩の研究」で日本漢学史の範囲であるが、論文には図書館の任務を論じて中日親善の要諦に及んだ漢文一篇が附載されてある。これこそ先生の生涯の序文だったのである。

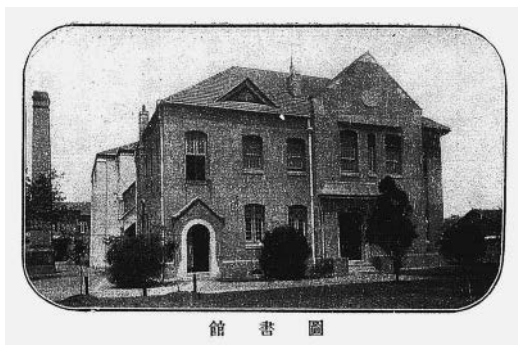
といっている。現在その卒論は伝わっておらず、ここにいう「漢文一篇」の内容も不明だが、それが「図書館の任務を論じて中日親善の要諦に及」ぶもので、武雄の生涯の「序文」になったというのは、さすがにその特色をよくつかまえている。あとに見るように、武雄は図書館人として漢籍の整理・研究にみずからの天職を見出し、その仕事を通して日本と中国の親善を図れると固く信じていたからである¹⁵。

なお、東大の選科というのは本科に準ずる課程で、本科生と同じく授業を聴き、卒論も書くのであるが、学士号は与えられず、したがって東大卒とはならなかった。ちなみに、のちに満鉄奉天

図書館において武雄の上司となる衛藤利夫も東大選科（美学専攻）の出身であった。¹⁶⁾

植野（以下、武雄を植野と呼ぶ）は東大選科修了後、翌大正十年（一九二二）五月に明治学院中学部の講師となり、大正十一年（一九二二）一月、二十五歳で上海の東亜同文書院図書館主任兼研究部委員となった。¹⁷⁾ 東亜同文書院は大正六年（一九一七）四月、徐家匯虹橋路百号地に新校舎を落成しており、植野はここで同院発行の図書目録および『支那研究』の編輯に従事する。

『支那研究』は大正七年（一九一八）同院内に設けられた支那研



館 書 圖



室 覧 閱 書 圖

写真1：東亜同文書院図書館および閲覧室
（『創立三十週年記念 東亜同文書院誌』
口絵、上海東亜同文書院、1930年）

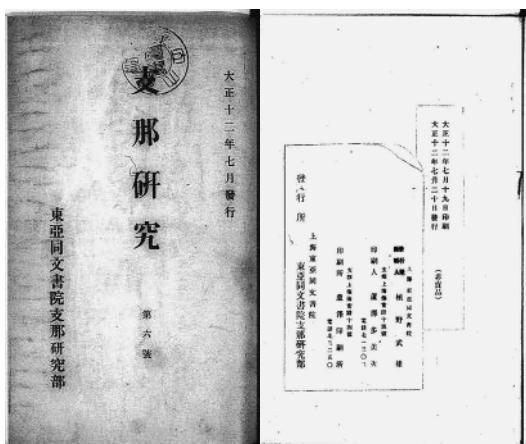


写真2：東亜同文書院『支那研究』第6号
表紙および奥付。「発行兼編輯人」として
植野武雄の名前が見える

究部の雑誌で、大正九年（一九二〇）八月に第一巻第一号を発刊した。その第六号（一九二三）奥付には「発行兼編輯人」として植野の名が見える。また、大正十二年（一九二三）十一月には新図書館が竣工、階上を学生閲覧室および事務室とし、階下は支那研究部として各教授の研究室が設けられた。これとは別に耐火性の三階建て書庫があり、一階は洋書、二階は和書および貴重書、三階に漢籍を蔵したという。¹⁸⁾ 青年植野は中国でこうした新型図書館に勤務し、図書館人として比較的恵まれた生涯をスタートさせたのである。この間、大正十一年（一九二二）夏には念願かなっ

て北京を訪れている。¹⁹⁾

大正十三年（一九二四）秋には亀井増子と結婚した。増子は明治三十七年（一九〇四）生まれで和歌山高等女学校卒業である。²⁰⁾結婚後、植野は単身で上海にもどる。

大正十四年（一九二五）春、植野は家庭を営むため、三年あまり務めた東亜同文書院を辞して帰国し、大阪の高津中学校教諭となる。²¹⁾こうして大阪に住むことになった植野は泊園書院で石濱の講義に出るのである。そのことを石濱は「竹城植野武雄先生」で、

（東亜同文書院に）居ること三年にして帰朝し、大阪府立高津中学校の教諭となり大阪に留まつた。此際に僕は君を知るに至つたのであろう。当時僕が藤沢氏泊園書院にて講義しているのを聴きに來ていられたのを思出す。

といっている。これよりやや後の昭和二年（一九二七）の記録によると、石濱は同書院で『説文解字』と章学誠『文史通義』を講じており、²²⁾おそらく同様の文字学・歴史学的文献を石濱から学んだものと思われる。後述するように、実証的漢学に関する石濱の考え方は植野に大きな影響を与えている。ただし一年後の翌大正十五年（一九二六）二月、長男の珪が生まれ、ついで同年春、植野は新設なった京城帝国大学法文学部の助手となり、妻子を伴って朝鮮京城に赴任した。ちょうど三十歳の時である。そして昭和四年（一九二九）四月まで三年ほど京城帝大に勤務する。石濱も「君の志は大陸にあつた」というように、植野は中国・朝鮮の學術

と文化に強いあこがれを抱いていた。

さて、京城帝大は大正十三年（一九二四）、朝鮮の京畿道京城府（現・ソウル特別市）に設立された日本十六番目の帝国大学である。この年の五月に大学予科が設置され、ついで大正十五年（一九二六）五月に法文学部と医学部を開設して大学の体制がスタートし、植野はその最初の助手になったのである。²³⁾

この時、植野は法文学部の支那哲学講座主任教授だった藤塚鄰（一八七九—一九四八、号は素軒）の指導を受ける。藤塚はのちに出版された『論語総説』や『清朝文化東伝の研究』で知られるように、漢籍研究および朝鮮における清朝文化の移入研究の先駆者であり、植野に重要な示唆を与えた。

植野はのちに、

私は京城帝大法文学部に在職中より藤塚素軒博士の御指導に依り支偉成氏の「樸学大師列伝」に含有さる、清朝学者三百七十人に就ての地方別に考へた清朝学者の地理上の分布の編纂を始め、昭和六年に至つて発表したのが、各方面の反響を忝くし、又需要も多かつた……

と語っている。これは植野の著作『滿支典籍攷』（後述）に載る巻末広告文の一部であるが、ここに「昭和六年に至つて発表した」論文というのは、『滿蒙』通卷一三六号（中日文化協会、十二年八月号、一九三一年）に掲載された「清朝学者と地理上の分布」のことで、この論文の前言でも植野は「この一篇は私が城大助手

時代に前城大法文学部長藤塚素軒教授の指示に従い大体のプランを立てたもの」と述べている。²⁴ また、ここにいう支偉成の著とは一九二八年、上海泰東図書館から出版された『支那樸学大師列伝』のことで、当論文構想の指示は清朝の学者について精査を進めていた藤塚鄰ならではのものだったといえよう。

この頃、京城帝大法文学部には支那哲学講座の助教授として昭和二年（一九二七）からは高田真治が、昭和三年（一九二八）からは加藤常賢が在職しており——二人はいずれものちに東大の中国哲学担当教授になった——、また朝鮮語学・朝鮮文学第一講座主任教授の高橋亨も朝鮮儒教研究を展開しつつあった。朝鮮史学の今西龍、小田省吾、東洋史学の鳥山喜一らもこの時期法文学部に在職し、²⁵ 朝鮮総督府では大正十四年（一九二五）以降、『朝鮮史』を編纂する朝鮮史編集会の修史官として稲葉岩吉が精力的に仕事をしている。こうした人々は若き植野にさまざまな刺激を与えたと思われる。稲葉岩吉とは以後も関係を続け、その還暦記念論文集には、後述するように労作「董越朝鮮賦考」を寄せている。京城帝大との関係でいえば、植野はその後、昭和九年（一九三四）四月、京城帝国大学文科の助手と副手により結成された「助手会」のメンバーになっている。²⁶ この会は助手・副手による研究と相互親睦をはかるもので、植野はかつての助手経験者として賛助会員になったらしく、助手会の雑誌『学海』第二輯（一九三五年）に論文「満洲地方志考」を載せている。

二 生涯 その2——後半生

1 満鉄奉天図書館員として

こうして研究者・書誌学者として研鑽を積んだ植野は昭和四年（一九二九）四月、三十三歳の時、京城帝大助手を辞して満鉄に入社し、満鉄大連図書館の司書となる。²⁷ 大連図書館の所在地は大連市東公園町二十九番地で、満鉄本社に向かい合って建つ近代建築であった。ついで一年後の翌昭和五年（一九三〇）四月、満鉄の奉天図書館司書に転任する。奉天図書館の所在地は奉天市荻町三番地、館長は衛藤利夫である。植野の住所は奉天市葵町十九番地のち奉天市平安通三十七ノ八であった。²⁸

この満鉄奉天図書館時代の十三年間こそは植野が漢籍のエキスパートとして最も活躍した時期であった。昭和八年（一九三三）四月には同図書館司書係主任となり、昭和十五年（一九四〇）五月には書目係主任、²⁹ 昭和十七年（一九四二）には南満洲鉄道株式会社副参事に昇任している。³⁰

ここで満鉄図書館についてざっと説明しておこう。そもそも満鉄の経営する図書館群は、その規模や組織、蔵書の内容いづれにおいても、当時の日本国内における図書館をしのぐものをもって³¹ いた。

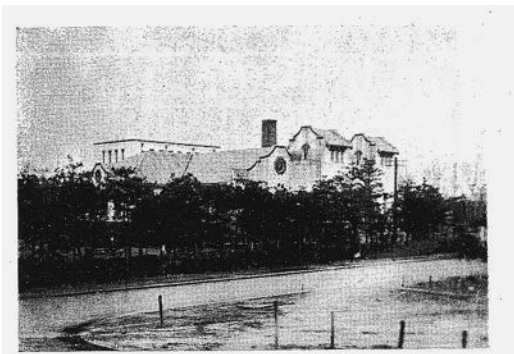
日露戦争後の明治三十八年（一九〇五）、ポーツマス条約によって関東州の租借権と南満洲鉄道の経営権を得た日本は国策会社で

ある南滿洲鉄道株式会社（滿鉄）を設立し、本社を大連に置く。滿鉄はその名のとおり主要業務は鉄道経営にあったが、特異なのは滿洲の広大な沿線附属地の経営権を有する行政的性格をもっていたことである。こうして滿鉄は大規模な近代都市建設計画のもとでさまざまな施設を運営したのであり、図書館設立もその一つであった。明治四十年（一九〇七）四月に会社としての営業を開始するや調査部図書室を設け、これが大正七年（一九一八）に滿鉄本社図書館から大連図書館へと発展する。

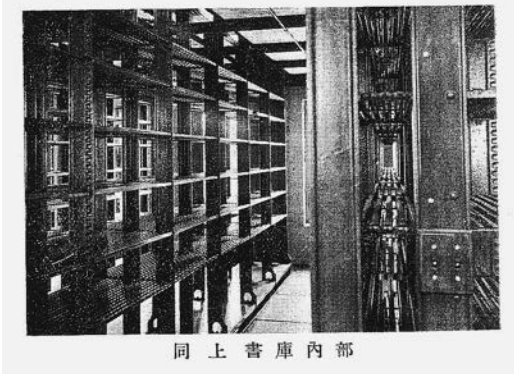
滿鉄はまた、鉄道の沿線住民の教養・娯楽のための図書閲覧所（簡易図書館）を数多く作ったが、そのうちのいくつかは蔵書の充実にもなって資料調査ための図書館、すなわち参考図書館となる。その代表がいま述べた大連図書館であり、そして奉天図書館と哈爾濱図書館であった。奉天図書館は大正九年（一九二〇）に、哈爾濱図書館は昭和十一年（一九三六）に参考図書館に昇格し、大々的に整備が進められるのである。

これら滿鉄図書館の整備発展にとりわけ尽力したのが柿沼介と衛藤利夫であったことはよく知られている。二人は大正八年（一九一九）、新設の大連図書館に司書として就職し、その後、柿沼は大正十年（一九二六）に大連図書館長と

なり、衛藤は奉天簡易図書館主事を経て、大正十一年（一九二二）、新たにスパニッシュ様式により竣工した奉天図書館の館長となる。滿鉄の潤沢な資金と内地にはない図書館長の自由な裁量のもと、これら滿鉄図書館は発展を続け、昭和六年（一九三一）三月末にはすでに大連図書館約十七万冊、奉天図書館五万冊余、哈爾濱図書館は二万冊を有するまでになった。³²⁾その経緯と充実ぶりは、のちに滿洲国の国立中央図書館籌備処旧記整理処長となった彌吉光長の説明がよく示している。すなわち、大連図書館については、



奉天圖書館全景



同上書庫内部

写真3：滿鉄奉天図書館全景および書庫内部
（『第三十一回日本図書館大会記念展覧資料目録』
口絵、滿鉄奉天図書館、1937年）

柿沼氏は一九二六年大連図書館長となり、一九四〇年には、一〇万冊の蔵書を三〇万冊に築きあげ、宋元版三〇〇点、東洋関係の洋書を網羅し、当時東洋第一の大図書館を作りあげて退職した。……大連図書館は柿沼氏の努力と満鉄の威力によって当時質量ともにアジア第一であった。⁽³³⁾ といい、奉天図書館については、

衛藤利夫氏が……この図書館を大連に並ぶ大図書館に盛りたてた。勿論予算と、本社の方の入れ方もちがうので、漢籍でも宋元版を誇らず、康熙、乾隆の版本に力を入れ地誌を集め、洋書は耶蘇会士の書翰や年報にというように重点的に収集されてきた。冊数からいえば大連の三分の一以下であるが、内地の図書館に比べれば一流の風格があった。⁽³⁴⁾ と語っている。

これらが内地をしのぐ第一級の大図書館であったことがわかるが、さらに特色あるのは、それぞれが専門の機関誌を定期的に刊行していたことである。大連図書館の『書香』、奉天図書館の『収書月報』、哈爾濱図書館の『北窗』⁽³⁵⁾ がそれで、これらは当初はおおむね新着図書情報の記事が中心であったが、次第に学術的に質の高い資料解説や論文、書誌研究などを載せるようになる。同時期の日本国内においてこのような専門誌を定期的に発行する図書館はほとんどなかったようで、ここからもその充実ぶりが知られるというものである。

さて、満鉄図書館の説明が長くなったが、植野はこのうちの奉天図書館館員として長く勤務し、図書館運営や図書の収集・整理、目録作成、漢籍の収集と充実に心血を注ぐのであった。植野は『収書月報』の編集責任者でもあった。植野は研究者としても研究にとり組み、『書香』や『収書月報』に多くの論文を発表している。この間、植野は数回にわたって満鉄語学検定試験委員をつとめ、学会活動にたずさわり、北京に資料調査・購入に出かけている。

学会活動について述べれば、昭和六年（一九三一）九月、大連と奉天の研究者が中心となって満洲学会が組織され、翌年から満洲文化協会の支援を得て『満洲学報』を刊行した。この学会は「満洲ヲ中心トスル文化研究並ニ其発表」を目的とするもので、植野は奉天の天野元之助、衛藤利夫、奥村義信、園田一亀、永尾龍造らとともにその会員となった。⁽³⁶⁾

さらに昭和十五年（一九四〇）には衛藤や松浦嘉三郎（国立中央博物館奉天分館長）の発案でこの学会を改組して奉天に満洲学会が設立される。植野はこの満洲学会のことを「衛藤元館長を中心に満洲学を樹立せんがため率先して奉天満洲学会を設立、奉天図書館に於て例会を主催して会員及び来賓の研究発表を試みる事三十余回に及」んだと回想している。⁽³⁷⁾ もって植野らの意気込みを知ることができよう。⁽³⁸⁾

同じ昭和十五年十月下旬には北京を再訪して北京人文学研究所や北京近代科学図書館、国立北京図書館、輔仁大学、燕京大学、



写真4：『木州詩存』の扉
(羅振玉題署)

北京大学などを視察し、地方志や日本・朝鮮・中国に関する文献調査を行なっている。

奉天時代のこととしても一つ興味深いのは昭和十四年(一九三九)八月、父徳太郎の古稀を記念して、その漢詩集『木州詩存』を奉天で刊行したことである。十二歳の時から漢詩の制作を始めた徳太郎の二千数百首のうち十分の二

を集めたといい、発行部数は三百部。倣宋活字本で唐本仕立ての一冊である。表紙題署は満洲国の要職もつとめた羅振玉(一八六六一―一九四〇)の筆になる。また、序文は泊園書院幹部の笠井静司、跋文は泊園書院第四代院主の藤澤黄坡による。

2 満鉄大連図書館員として

さて、昭和十二年(一九三七)三月、満洲国が日本軍部によつ

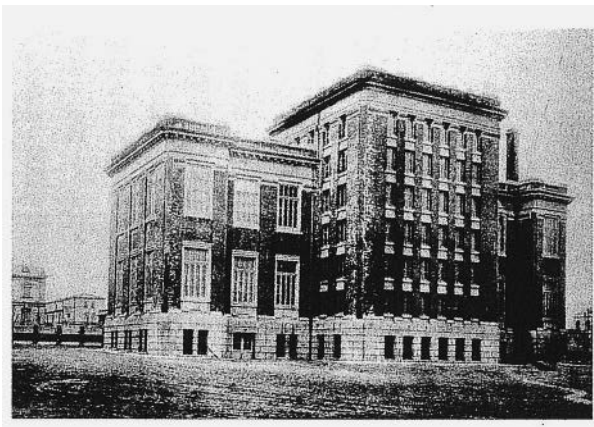
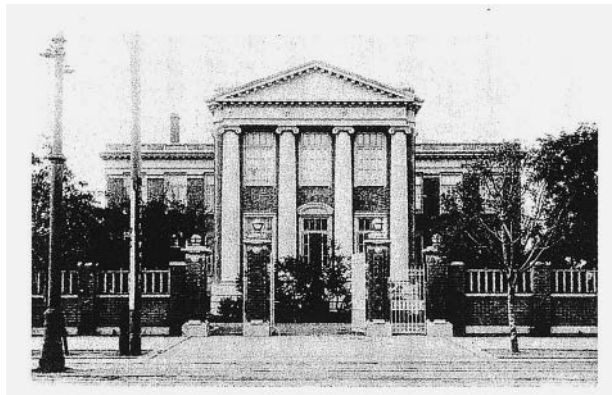


写真5：満鉄大連図書館本館および書庫
(西澤泰彦『日本植民地建築論』、名古屋大学出版会、2008年、221頁)

て成立すると、これら満鉄図書館はその統制を受けて大きな改編をこうむり、方向転換を余儀なくされる。そのため昭和十五年(一九四〇)三月には柿沼が大連図書館長を辞職し、同年九月には衛藤が奉天図書館長を辞任して館長事務嘱託となった。

昭和十七年(一九四二)十二月には、大連・奉天・哈爾濱の三図書館は満洲国における調査機関の一部門であることが示され、任務分担も定められた。大連図書館が東亜に関する総合図書館と

される一方で、奉天図書館は交通を中心とする社業図書館と規定され、鉄道局資料室の管下に置かれることになる。

この決定にもとづき、昭和十八年（一九四三）二月以降、奉天図書館の漢籍類およそ五万冊が大連図書館に移された。一方、大連からは交通・工学関係資料五千冊が奉天に移送された。「衛藤らが二〇年の歳月をかけて築いてきた奉天図書館の歴史は、この時点で終わった」とされる。⁴¹ 衛藤は植野の大連図書館転任を条件として、この改編を承諾したという。⁴²

こうして植野は昭和十八年五月、今度は大連図書館の漢籍係主任となつて単身赴任した。図書館員として引き続き業務にあたるとともに、著書『滿支典籍攷』を奉天から刊行するなど、多忙な時期を過ごしている。

また昭和十八年十月から翌年にかけて、植野は北川勝夫大連図書館長とともに北京に出張し、特別予算により『永楽大典』の遺巻数冊や朝鮮国王来書・奏疏稿、『万曆疏鈔』、写本『大清実録』、満文図書など、貴重漢籍約八百部約一万冊を得た。満鉄図書館最後の大規模図書購入といえるかもしれない。これについては植野「特別購入による貴重漢籍類に就て」（『書香』第十六卷第二号、一九四四年）が詳しく報告している。

3 戦後

昭和二十年（一九四五）八月、日本の敗戦によって、繁栄した

満鉄および満鉄図書館は終わりを告げ、進駐してきたソ連、ついで中華民国政府によって接収される。すなわち満鉄は解体され、中ソ友好同盟条約の調印により設立された中ソ合弁会社「中国長春鐵路公司」（略称は中長鐵路）に業務を引継ぐ。満鉄社員の多くはこの中長鐵路に再雇用され（いわゆる留用）、戦後処理と業務にあたることになる。⁴³ 植野もまた留用により大連にとどまった。

この終戦直後のようにについては、大連図書館司書で戦後もしばらく中国に残留した大谷武男が次のように伝えている。

戦争が終り、ソ連軍が大連に進駐して満鉄を接収すると同時に、大日本帝国南滿洲鉄道株式会社大連図書館は終焉の幕を下ろした。そして内外に誇っていた貴重書類も、ポポフ調査団の手でモスコウに持ち去られた。……連図は中長鐵路大連図書館と改称、ソ連人管理の下で閉鎖され、残った少数の日本人館員達は、前年北京から購入し放置したままの漢籍の整理と図書カードの露訳に日を送って日本への引揚げを待つばかりだった。⁴⁴

終戦当時、植野は大連図書館漢籍係主任であり、ここに述べられたことはまさに植野にもあてまるものであった。ここにいう、前年北京から購入した漢籍とは、上に述べた植野の購入した一万冊の書籍群を指すと思われる、植野もその整理業務にあたったに違いない。また石濱の「竹城植野武雄先生」はこう伝えている。

終戦後は大連に留り、中長鐵路公司、科学研究所、中央圖書

館上級司書、兼同経済調査局調査員（人文地理）として勤務し、多年の感慨を残して昭和二十二年二月に引揚げ帰還した。舞鶴に帰着して故郷の家も戦災に遇い万巻の蔵書も煙散したるを知ったのであった。

ここにいう「科学研究所」とは昭和二十一年（一九四六）一月、ソ連が大連に組織した文化機関で、旧満鉄の中央試験所を中心に調査部、地質部、鉄道技術研究所、大連図書館など八カ所を編入して成立した⁽⁴⁵⁾。この時、大連図書館は科学研究所中央図書館と改称され、前述の柿沼介が昭和二十三年（一九四八）まで館長として留用されている⁽⁴⁶⁾。植野はそのもとで司書、研究員としての業務にあたったことになる。

こうした戦後の混乱の紆余曲折を経て植野は昭和二十二年（一九四七）二月、ようやく日本に帰還した。昭和二十年（一九四五）七月九日の和歌山大空襲により和歌山市内の徳太郎の住む実家は全焼しており、「万巻の蔵書」も煙散したという（石濱「竹城植野武雄先生」）。当時来訪を受けた石濱によれば、植野はかなり老け込んで見えたそうだが、「然し幸い君の好学の心は少しの衰えもなく、終戦姿の雑囊から古本を取出しては僕に見せたものである」（同上）と回想している。

植野はまもなく同年四月、関西大学専門部教授を長く務めた藤澤黄坡の紹介により関西大学講師となった。さらに翌昭和二十三年（一九四八）三月には和歌山市関戸高松百八十二番地に移居し、

徳太郎らとともに一家全員が同居する。同年四月には和歌山市の三尾高等学校教諭を兼ねた。翌昭和二十四年（一九四九）八月には和歌山県立図書館において、紀伊藩に仕えた漢学者、倉田績⁽⁴⁷⁾の蔵書の整理を嘱託され、これに鋭意とりくんでいた。しかし同年九月二十六日、脳溢血に倒れ、五十二歳の生涯を終えるのである⁽⁴⁷⁾。なお、長男の珪はその年に京都大学文学部東洋史学科を卒業し、十二月に山一證券大阪支店に就職した。また父・徳太郎は翌昭和二十五年（一九五〇）四月九日に八十歳の生涯を閉じている。



写真 6：植野の家族 昭和 8 年撮影
（『木州自叙伝』口絵） 後列中央に立つのが植野
武雄と思われる。左の軍服姿は父・徳太郎

三 業績 その1——図書館司書として

植野は東洋学の分野で多くの仕事をした。その業績は大きく図書館司書としてのものと、研究者としてのものに分けることができる。次にそのことにつき述べてみたい。

1 満鉄奉天図書館における漢籍・地方志の充実

植野は図書館人として満鉄奉天図書館の運営、充実のために尽力した。館長の衛藤利夫（一八八三—一九五三）は才気煥発、その情熱と努力により同図書館をアジアを代表する図書館に育てあげるとともに、図書館の管理運営や目録作成法などに業績を挙げた。戦後の昭和二十一年（一九四六）には日本図書館協会理事長もつとめ、日本の図書館業務のトップに立っている。

このように、衛藤はすぐれた図書館人であったが、もともと美学専攻の衛藤はヨーロッパ語文献には詳しくなかったものの漢籍については不得手で、植野の専門的知識に頼っていた。衛藤が収集につとめたのも明末以降におけるヨーロッパ人宣教師の東洋学関連著作であり、そのことは「奉天図書館名著解題」として衛藤が刊行した『ピントの東洋旅行記』以下五点の解題からも知られる⁴⁸。衛藤の代表作『韃靼』もまた、内容の多くは中国や満洲地域におけるキリスト教宣教師に関する論文・随筆で占められ、資料もつばら西洋の文献によっている⁴⁹。

このことについて中見立夫は「衛藤の場合、漢籍については植野武雄の知識が重要な役割をはたしたとおもわれる」とし、

衛藤は漢籍には関心がなく、ヨーロッパ語による東洋学文献に依拠している。……これは、もともと衛藤がヨーロッパ語文献から学問に入っていた事情もあり、また部下にたとえば植野武雄のような漢籍の専門家がいて、漢籍を媒介とした研究はそのような人物がおこなえばよいと考えていたところがあるようだ。

といっている⁵⁰。そのとおりであろう。植野は衛藤の補佐として奉天図書館の業務を支えた功労者なのであった。逆にいえば植野の漢籍面での援助がなければ奉天図書館の充実もなしなかったことになろう。大連図書館の漢籍収集はもっぱら松崎鶴雄（一八六七—一九四九）があたったが、奉天図書館の漢籍収集は植野によるところが大きかった。衛藤自身の著述目録を作成したのも植野であり、植野は奉天図書館の維持と充実になくはならない人物であった⁵¹。

地方志とりわけ満洲地区の地方志も同図書館の誇るべきコレクションであり、その収集には植野が尽力している。昭和十五年（一九四〇）の植野の整理によれば、同館所蔵の地方志は鉄道総局資料課からの委託本を含めて千二百八十四種、二万六千七百二十七卷、一万二千四百九十六冊という膨大な数にのぼっている⁵²。当時満鉄調査部で日本と清朝政府との交渉史を研究していた原覚天は

滿鉄奉天図書館にしばしば足を運んだが、最も有益だったのはその膨大な「方志」類だったといっている。⁵⁴⁾

こうして満州事変当時、四万数千冊だった図書館の蔵書は昭和十八年（一九四三）、植野が同図書館を離任する直前の最盛期には十数万冊に達した。⁵⁵⁾ また、この少し前の昭和十七年（一九四一）三月、衛藤の奉天図書館長事務嘱託退任記念として出された『収書月報』において、植野は衛藤の功績を称えつつ、

所謂奉天を中心とした満洲・支那・日本・欧米に及ぶ鬱然たる東洋文献の蒐集を以て特色とする東洋有数の世界的図書館と自他共に称せらるゝに至った。

と語っている。⁵⁶⁾ こうして奉天図書館は東洋学に関するアジア有数の図書館となったわけである。

なお、奉天図書館では「奉天図書館叢刊」として全二十五冊を、「満洲学叢刊」として全二冊を刊行しているが、あとにも紹介するように、前者の二十五冊目が植野の『満洲地方志考』であり、後者の二冊目が植野の『満洲地方志綜合目録』であった。

2 満州事変に際して

さて、話は前後するが、奉天図書館司書として赴任した植野が衛藤のものとでまぎら行ななった大きな仕事は、昭和六年（一九三一）九月十八日に勃発した満州事変への対応であった。

この時期の奉天図書館の活動について、植野は、

満州事変勃発するや発端の地なる奉天に於て衛藤元館長の発意で全満によびかけて十数万冊の図書、雑誌を集め陣中文庫として全満の軍警慰問のため各地に配布したり奉天に移駐した関東軍を始めあらゆる方面の調査に使せんがため在満二十四図書館の蔵書をも総動員の目的で「全満二十四図書館共通満洲関係係和漢書件名目録」を作成されたのも同事変に対する在満図書館人共同の記念塔であつた。⁵⁷⁾と述べている。

ここにいう「陣中文庫」とは一般から日本語の書籍や雑誌を募り、それを満鉄の全図書館を通して奉天図書館に集めたいえ、前線にいる兵士や警察官の慰安のためにこれを送ったものである。昭和六年（一九三一）十二月の募集開始から翌年五月までの六か月の間に図書雑誌十一万六千冊、新聞一万六千部を集め、奉天図書館員はこれを休日返上で各地に発送、いづれも大歓迎を受けたという。⁵⁸⁾

また『全満二十四図書館共通 満洲関係係和漢書件名目録』は「陣中文庫」の作業と並行して作成された大部な目録で、全三百五十頁余にのぼる。満鉄の経営する二十四の図書館が「満蒙、支那を中心とした、政治、外交、風俗、社会、等々々」⁵⁹⁾に関する一切の本をカードにとつて奉天図書館に送り、奉天図書館がこれまた昼夜を問わず整理、編集した。その特色は「件名」による分類になつていて、モノの名を五十音順に「麻」「亜細亜」「阿片」

というように並べており、「哲学」「宗教」「科学」といったそれまでの分類目録とはいっぶう異なる実用的分類をとって、当該のモノをすぐ調べられるようになっていた。この目録はそれまでの日本にはない、件名目録の嚆矢とされる。

このように、満洲事変の中心地奉天において植野は衛藤の右腕として仕事をしたわけだが、もう一つ重要なのは文淵閣四庫全書を戦火から守ったことである。

そもそも清の乾隆帝時代に完成した一大叢書「四庫全書」は、北京の文淵閣のほか、奉天故宮の文溯閣、北京円明園の文源閣、熱河避暑山莊（現・承德市）の文津閣に収められ、さらに一般人の閲覧に供するために揚州の文匯閣、鎮江の文宗閣、杭州の文瀾閣に各一部が蔵された。

これら七部の四庫全書はその後、多くが内乱や戦火によって失われたが、奉天文溯閣のそれは一部が散佚しただけで、ほぼ完全な状態で伝えられていた。この文溯閣四庫全書が満洲事変の混乱の中で消失の危機に瀕したのである。

この時、植野は衛藤とともに四庫全書保全のために奔走した。その時の経緯は衛藤のエッセイ「文溯閣の危機」^①に詳しいが、植野の論文「四庫全書に就て」^②の、おそらく衛藤の撰になるとと思われる前にも、

九月八日夜半の夢を破る瀋陽城頭の砲声をキッカケにアジアは今震撼しつつある。

その震撼のたゞ真ん中に、奉天省城にはわが日章旗に守られつ、「四庫全書」がある、『滿文老檔』がある、『滿洲実録』の原本がある、『康熙地圖』の銅版がある。中国南方の新聞が、日人が四庫全書を掠奪したなどと大々的に書き立て、居るのは、根も葉もない悪宣伝だ。日本の道義は、この人類共通の至宝にして、東洋文化の全交響楽を戦塵渦巻く間より、恙なく守り終せて、子孫と、世界の学界に罪を得るようなことは、万々ないことを吾等は確信する。その『四庫全書』とは何か？ 本号に掲げた一編は、奉天図書館の植野氏が時節柄特に本誌の為に起稿せられたもの読者の清鑑を待つ。

また、植野自身も奉天放送局における放送原稿「文溯閣四庫全書に就て」（一九三七年）で、

昭和六年の満洲事変の際支那南方の新聞は日人が四庫全書を掠奪したなどと大々的に書きあげたり、民国二十四年即ち我が昭和十年刊行の文淵閣蔵書全景の後記に朱啓鈴氏が引用して居ります。商務印書館影印刊行の経過略の文章中に満洲事変後、満鉄図書館が四庫全書を持ち去ったなどござりますのは真赤なうそで根も葉もないことでありまして、其の満洲事変直後、あちこちに火煙があがり、伝令飛びかひ、警備電話のやかましき、非常線のはりめぐらされた所謂兵馬控徳のどさくさの最中に私共の満鉄奉天図書館の衛藤利夫氏と共に、

私は関東軍司令部に岡部参謀、地方維持委員会に袁金鏡委員長、奉天市役所に土肥原市長、奉天憲兵隊に三谷隊長、満鉄奉天公所に栗野所長を歴訪して文溯閣四庫全書の保全方を懇願いたしました経験がございます。

と、その東奔西走について語っている。そして最後には土肥原賢二・奉天臨時市長の名で、四庫全書を毀損した者は厳罰に処すとの布告が出され、関東軍の保護下に入ることできなきを得た。土肥原が布告を出したのは事変勃発から間もない九月二十六日であり、その全文は、植野によれば次のとおりである。⁶²⁾

為佈告事。四庫全書為全世界之至宝。尚有遺失損壞、実為本市保護文化之遺憾。值此時局漸趨平穩。俟規定有一定手續後。再定期正式開放。現在暫時禁止一般參觀。仰爾市民人等一體周知。如有違犯定按軍律処罰。決不姑寬特。此佈告。

満洲事変は日本軍が起こした戦乱であるから、この事変がなければ四庫全書も危機には瀕しなかつたわけだが、その価値を知らぬ者たちによって蹂躪される危険性は十分にあった。そうした兵火のさなかに「人類共通の至宝」である貴重書を守り通した植野らの努力は、やはり評価してよいであろう。とりわけ北京円明園の文源閣本が咸豊十年（一八六〇）のいわゆるアロー戦争の際、英仏聯合軍の攻撃により灰燼に帰したこと、文匯閣本および文宗閣本が咸豊三年（一八五三）、太平天国軍の焼き討ちに遭って亡佚していることを考えればなおさらである。

さて、こうして守られた文溯閣四庫全書のその後について述べておけば、満洲国建国直後、大同元年（一九三二）六月に開館した国立奉天図書館——これは満洲国の国立図書館であり、これまで述べてきた満鉄経営の奉天図書館とは違うので注意されたい——の所管となった。国立奉天図書館は摂取した張学良邸に本館を置き、当の文溯閣が分館となった。そして康德二年（一九三五）、文溯閣の敷地内に防火設備を施した鉄筋コンクリート二階建ての新書庫が作られると、四庫全書はそこに移された。⁶³⁾

植野は国立奉天図書館の設立に協力しており、当然ながら四庫全書の事後の整備にもかかわっている。⁶⁴⁾

さて、この時期に作成されたのが、当時国立奉天図書館副館長の任にあった金毓黻の『文溯閣四庫全書提要』（遼海書社、一九三五年）であり、また『文溯閣四庫全書要略及索引』（国立奉天図書館、一九三八年）であって、これらは戦前の中国・日本における四庫全書研究としてひときわ異彩を放っている。特に金毓黻手定の『文溯閣四庫全書提要』は文溯閣四庫全書の各書冒頭に附された提要を抜き出し、単行本として活字印刷したものであって、その記述はかつて乾隆六十年（一七九五）に上梓された欽定『四庫全書総目提要』すなわち一般の「四庫提要」と内容が違うところがあり、たいへん貴重である。文溯閣が守られたことによりこれらの成果も生まれたことになる。

なお、文溯閣四庫全書は人民共和国以後も無事保管され、一九

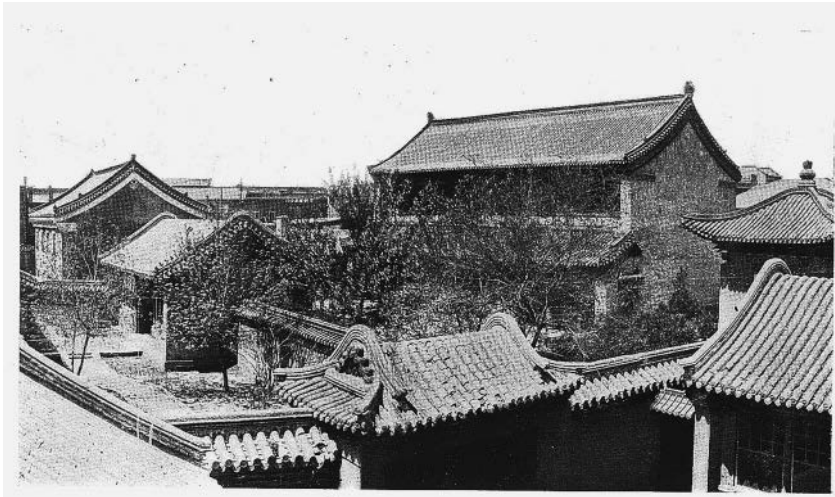


写真7：文溯閣全景

〔『文溯閣四庫全書要略及索引』口絵、国立奉天図書館、1938年）

六六年、戦略的見地から蘭州の甘肅省図書館に移管されて現在に至っている。⁽⁶⁶⁾

3 図書の整理、目録の作成

植野は図書の整理、目録の作成にも精力的に取り組んでいる。いくつか重要な事項を挙げてみよう。

まず、満鉄奉天図書館が刊行した『第三十一回日本図書館大会記念展覧資料目録』がある。この目録は昭和十二年（一九三七）六月三日から十日まで、第三十一回全国図書館大会が満洲の大連・奉天・新京などを会場に開かれた際の展覧目録で、全二十五頁。編集人は植野、発行人は衛藤である。

全国図書館大会というのは明治三十九年（一九〇六）以降、全国すべての図書館をたばねる日本図書館協会により毎年一回開催されていた全国集会であり、ふだんは日本内地で開かれるのであるが、この時は特に満洲で開かれた。そして大会開催に合わせて満鉄大連図書館、国立奉天図書館、満鉄奉天図書館、満日文化協会（諸家所蔵善本）がそれぞれ所蔵する善本の展覧会を開き、満鉄奉天図書館に関しては植野がその展覧目録を作ったのである。⁽⁶⁷⁾

本目録の内容は（A）東洋関係文献、（B）満洲関係碑拓、（C）満洲国地方志、（D）四庫全書関係資料、（E）満洲事変並満洲国建国資料に分かれ、簡明な解説がつけられている。このうち東洋関係文献における『乾隆御製盛京賦』やヨーロッパ人の東洋関係著作、満洲関係資料とりわけ地方志は、同図書館のコレクションとしてきわめて特色あるものである。

同じく満鉄奉天図書館刊行の『満洲史文献展覧会目録』は昭和

十五年（一九四〇）における「滿洲史文獻展覽會」の展列目録であり、奉天図書館所蔵の滿洲史関係の文献のうち乾隆帝時代以前の主なものを掲げている。全二十三頁。編集人は植野、発行人は衛藤である。「通史」「上代」「高句麗」「渤海」「遼」「金」「元」「明」「清」に分け、漢籍のほか日文、欧文の書物百四十六点、碑拓二十六種を載せるとともに説明をつけている。ここには「高句麗」や「渤海」のジャンルも立てられており、一国主義を超えた東北アジアの歴史に関する広範な資料紹介となっている。

個人コレクションの目録としては「福田文庫」、「石本文庫」および「小平文庫」を整理、編集し、公刊している。

「福田文庫」は昭和十五年（一九四〇）奉天図書館に寄贈された、大阪の町人学者で泊園書院門人でもあった福田宏一の蔵書の日録である。⁶⁸ このコレクションを植野は「福田本」についてと題して紹介し、またその中の善本として『明版天目中峯和尚広録』を取り上げ解題をつけている。

「石本文庫」は滿鉄理事の石本憲治の蔵書で、石本は松崎鶴雄——前述した、大連図書館の漢籍収集責任者で、号は柔父——を囲む会の会長であり、その苦心して収集した漢籍の主なもの百二十余点が奉天図書館に寄贈されたことにより目録が作成された。⁶⁹ 植野は目録末尾の「石本文庫の整理を終へて」において、嘉靖版『杜工部詩集』、万曆版『花間集』、汲古閣本『宋名家詞』などのほか『金瓶梅』や『芥子園画伝』、拓本類などを貴重善本として挙げ

ている。

「小平文庫」は滿支生活四十年に及んだ小平総治（号は綏方）の蔵書で、目録は『本館所蔵 小平文庫目録』（全三四頁、滿鉄奉天図書館）として出版された。植野の「小平文庫の整理を終へて」⁷⁰ によれば、総計八百三十四点のうち、とりわけ金石文の拓本が六割を占め、なかでも周・秦から漢魏六朝・唐を経て明代に至る古拓が貴重であるという。

ちなみに、これら植野作成の目録は内地においても学者の注意を惹いており、先にも触れた昭和十七・十八年度の『東洋史研究文献類目』⁷¹ では、倉田淳之助が「書誌学」の項でこう取り上げている。

学者の足が宙に浮き勝ちとなり、既刊誌が次々に終刊、停刊を告げつつあつた時に、書誌学上の業績の盛大を望むのは固より無理なことである。とはいふものの、積年の余勢蓄積がものをいつてるといふ心強さを感じさせる点もある。……

奉天図書館の収書月報に「石本文庫目録」「小平文庫目録」というものが見える。前者は前滿鉄理事木石本憲治氏の旧蔵書の中、漢籍を主とする大部分が同館に贈られた記念目録で、石本氏は滿鉄社員の松崎鶴雄氏を囲む柔父会の会長である。私はこの目録に見える一百二十余部を通じて、多忙に活躍するこれらの人々がいかなる支那的教養を身につけていたかの一斑を窺ふことに興味を覚える。……「小平文庫目録」は滿

支生活数十年といふ故小平総治氏の遺書で同じく同館に入つたもの。拓本が大部分を占め、八三・四・中五・一二点が拓本であり、その他のものも善本こそないが四部にわたつて揃つてゐる。が衛藤館長が入手に当つて最も期待したのは全体の六割に達する拓本であつたらう。この二つは満洲に於ける文献の消息である。

書誌学が不振な中においても「積年の余勢蓄積」による書誌学の成果が現われたといい、植野が編集した二つの書目を高く評価しているのである。

4 研究者への支援など

もう一つ、植野の貢献として述べておくべきは研究者に対する支援である。もちろんこれは図書館業務の一環という側面ももっている。

これに関して植野は、

満洲事変直後、一時は満洲文化の中核ともなつた奉天図書館は内・鮮・台・支の各方面より殺到した学者に対する応対やら研究会などを一手に引き受け迎接に遑なかつた事もあつた。⁷²と述べている。当時の満洲の中心、奉天にある図書館の主要館員として、多くの研究者の支援や対応にあたつていたことがわかる。

このことについては石濱純太郎も「竹城植野武雄先生」において、「其頃の内地学者の大陸に遊ぶものは殆ど皆君の応接に与らな

いものはなく」といつている。

いわゆる遼の慶陵の哀冊碑石発見にも植野は立ち会つたようである。慶州（現・内モンゴル自治区巴林左翼旗白塔子）の山中にあった遼の第六代皇帝・聖宗（九七二—一〇三二）らの陵墓、すなわち慶陵は昭和五年（一九三〇）、熱河の軍閥・湯佐栄によって盗掘され、墓室内の碑石はじめ副葬品は行方不明になっていた。しかし昭和七年（一九三二）三月、調査に入った京都帝大の田村実造らは探索に努め、奉天の湯佐栄邸内に哀冊碑石十五基が保管されているのを見出し、狂喜した。⁷³このことを当時奉天にいた植野は「内外の学界を驚かした」事件として印象深く伝えている。のちに、田村らによつてこれが整理されて大著『慶陵』がまとめられ、世界的な注目を集めることになる。

また、先にも触れた金毓黻（一八九七—一九六二）との関係も指摘しておきたい。奉天遼陽生まれの金は満洲の張作霖・張学良政権のもとで遼寧省教育庁長などの高官をつとめるが、満洲事変で軟禁されたあと、大同元年（一九三二）、満洲国の奉天省公署参事官となり、ついで国立奉天図書館副館長を兼任した。⁷⁴翌年には満日文化協合理事となる。金は満洲史・東北史において先駆的研究を進め、植野とも研究者として交流があつた。たとえば労作『渤海国史長編』（遼陽金氏千華山館、一九三四年）の卷末識語では稲葉岩吉、鳥山喜一と並んで植野武雄に対して、史料上の援助に謝辞を呈している。当時、稲葉岩吉は朝鮮総督府朝鮮史編修会の修

史官、鳥山喜一は京城帝国大学法文学部教授であった。金はこの書の撰述にあたり、植野を通して満鉄奉天図書館の地方志その他の資料を渉獵、活用したに違いないのである。

植野は、金が奉天で刊行していた雑誌『東北叢刊』についても丁寧で紹介している（後述）。

また、昭和十三年（一九三八）、奉天省公署から刊行された大著『奉天通志』二百六十巻・百冊について、植野は、編纂者は総裁の翟文選以下七十一名に及ぶものの「私は実際仕上げに渾身の努力をして居たことを数年間目撃した金毓黻を代表者として」（『満洲・支那地方志概観』一三頁）⁽⁷⁶⁾とっている。金の仕事を実見していた植野ならではの証言であろう。

ほかに、園田一亀や永尾龍造の諸研究は奉天図書館の蔵書を最大限利用したものであった。彼らとともに奉天在住の研究者で、園田の『宋・徽宗皇帝の満洲配流』（一九三七年）は奉天図書館「満洲学叢刊」の第一冊として刊行されている。このシリーズの第二冊が植野の『満洲地方志綜合目録』であることはすでに述べた。ほかにも、上述した「奉天図書館叢刊」二十五冊のうち何と十三冊は『鞆岬漂流記研究』以下、園田の著作で占められており、奉天図書館および植野と園田の関係が深かったことが知られる。⁽⁷⁷⁾

永尾龍造に関しては、植野にその業績を紹介した「大陸事情——永尾龍造先生の業績——」（『収書月報』七六号、一九四二年）があり、両者の交流をよく物語っている。⁽⁷⁸⁾

四 業績 その2——研究者として

次に、研究業績について見てみよう。植野は研究者として諸方面にわたる先駆的成果を残しているが、その内容はおおむね五つに分けることができると思われる。

1 満洲・中国の地方志研究

植野が自身の研究テーマとして鋭意取り組んだのが地方志研究、とりわけ満洲地区のそれであった。

植野は満鉄奉天図書館司書になってまもなく、館報『書香』に「満洲地理文献考」を五回にわたって連載する（一九三二年）。この方面における最初の論考であり、東三省すなわち満洲地区に関する通志と府県志を通観して省ごとの分類「満洲府県志表」を載せるとともに、満洲全体の地方志『盛京通志』の諸本と内容につき論じている。これを補訂した論文「満洲地方志考」（一九三五年）では、ひき続き『盛京通志』を論じるほか「第二次満洲府県志表」も載せ、満洲関連地方志の所蔵は北京の国立北平図書館よりも満鉄奉天図書館の方が多く、「最多か」と誇っている。

これに続く『満洲地方志綜合目録』（一九三九年）は前にも触れたように、満鉄奉天図書館から満洲学叢刊第二冊として刊行されたもので、全二十四頁。清代および清代以降に編纂された地方志のうち、昭和十三年（一九三八）十二月の時点で在満四図書館（満

鉄奉天図書館、満鉄大連図書館、満洲国立奉天図書館、奉天市公立瀋陽図書館）に蔵される満洲各省の地方志の総合的目録であり、それまでの調査・研究を大幅に補訂している。まず『盛京通志』以下の通志を列挙し、ついで省ごとに府県志を挙げるとともに「府県志表」（第三次満洲府県志表）を掲げ、前二回の統計表を補充している。末尾には本目録にはないが他の方志目録に著録される関連地方志を挙げて網羅を期している。きわめて包括的な研究であって、植野の満洲地方志研究を集成した労作といえる。⁷⁶⁾

『満洲・支那地方志概観』（一九四二年）は満洲のみならず、中国も含めた地方志を概観したもので、満鉄調査部奉天図書館、特別資料第一号として刊行された。全二十八頁。地方志全般につき、その名称、地位、種類、編纂、内容の五章に分けて論じたもので、その論じる範囲の広さ、論述の精確さといいい、手際の良いすぐれた概説となっている。

このほかに「蘇州方志考」、「奉天通志に就て」、「本館架蔵北支五省地方志簡目」（いずれも一九三八年）、「永吉県志」（一九四〇年）がある。さらに「瀧川博士の泉石書屋蔵満洲地方志目録（上）」を読む（一九四二年）は当時、満洲国の建国大学教授で法制史研究の権威であった瀧川政次郎の論考をめぐって地方志（方志）と地誌の違いを述べて再検討を促すとともに、『盛京通志』の版本に関する誤解を指摘し、さらに満洲研究の不備を補うなど、地方志研究の専門家として面目躍如たる内容となっている。

なお、その後、大連の満鉄調査部では植野が中心となって満洲の各図書館の所蔵する満洲地方志のいっそう完備した目録を編纂していたらしいが、結局、未刊のまま終戦を迎えたようである。⁷⁸⁾ 中国地方志の近代的研究において、植野は朱士嘉や張国淦と並ぶパイオニアとして業績を挙げたといえよう。

2 四庫全書とりわけ文溯閣の研究および目録学

文溯閣四庫全書のことには前に触れたが、植野にはこれに関連する専論や目録学関連の論文もある。

「四庫全書に就て」（一九三一年）は文溯閣四庫全書を戦火から守った直後の論文で、四庫全書編纂の沿革や四庫全書の内容、そして文溯閣について紹介している。続く「奉天文溯閣四庫全書に就て」（一九三七年）は第三十一回全国図書館大会開催に合わせ、「四庫全書に就て」を補訂して書かれたものである。「文溯閣四庫全書に就て」（一九三七年）はすでに触れたように、奉天放送局から全満洲に向けて放送された原稿である。

また「統修四庫全書総目考」（一九三七年）は、大正十四年（一九二五）、日本が東方文化事業の一環として設立した北平人文科学研究所で編纂されつつあった書籍解題「統修四庫全書総目」につき、その趣旨と経過、収録書籍の四庫全書との違いなどについて詳述している。

このほか、目録学関係の論文としては「奉天の生んだ兩叢刊に

就いて1、「萃升書院と萃升書院叢刊 奉天の生んだ兩叢刊に就いて2」（一九三三年）がある。前者は一九三〇年一月から翌年八月まで遼寧省教育庁編訳処から毎月刊行されていた雑誌『東北叢刊』を紹介したもので、先述したように同誌の編集責任者は遼寧省教育庁長だった金毓黻である。また後者は、奉天城内にあった萃升書院が出版した「萃升書院叢刊」に関する論文で、王樹柵、高歩瀛、吳闓生、吳廷燮らによって行なわれた経史子集に関する講義録を紹介している。萃升書院はこれより少し前、張学良が院長、于省吾が学監となつて復興したもので、萃升書院の沿革についても述べられている。

「漢籍に就て」（一九四一年）は漢籍の概念とともにその分類法を述べる。ついで「漢籍分類法変遷史」（一九四三年）は長い歴史をもつ中国目録学の変遷過程を整理したもので、いま読んでも実証的で要領よくまとめられた好論文となっている。⁸¹昭和十七・十八年度の『東洋史研究文献類目』において、これまた倉田淳之助が「書誌学」の項で当論文を取り上げ、

目録の源流について……植野武雄氏の「漢籍分類法変遷史」（収書月報八八号）……植野氏の論文は研究報告として発表されたもので、七略から四庫提要に至る流変を手際よく解説してあつたと記憶する。

といっている。この植野の論文は倉石武四郎が戦後の昭和二十三年度、京都大学で行なつた名講義「目録学」に先立つもので、日

本におけるすぐれた中国目録学研究の一つとして記憶にとどめておくべきものと思われる。

3 満洲文化の研究

植野は満洲のさまざまな文化に関しても研究を残している。

「迷鎮山娘娘廟碑記考」（一九二九年）は満鉄大連図書館の司書になつて間もなく書かれた論文で、有名な大石橋迷鎮山の娘娘廟に残る碑文に関する考察である。植野はこれ以後も折に触れて関連論文を発表しており、「九連城に関する文献（日清役以前）に就て」（一九三三年）は、日清・日露戦争の際、鴨緑江を渡つた日本軍が占領した清の九連城に関する歴史地理的考証である。「龍と満洲の地名」（一九四〇年）、「巳歳に因みて——蛇に就ての文献」（一九四一年）、「満洲の地名に就て」（一九四二年）は、満洲の地名を歴史地理文献により考証している。

この方面では『奉天を詠じた漢詩集』（一九四〇年）もあり、書物同好会冊子の第十号として朝鮮京城で刊行されている。瀋陽、盛京とも呼ばれた奉天の地は満洲地区の中心で、古来、皇帝や文人が多く訪れ詩を残しているが、ここでは清朝人の詩集を中心として、朝鮮人や日本人の漢詩も紹介している。清朝人としては道光帝の「御製盛京巡幸詩」をはじめ趙秉忠、姚元之の詩集、万泉八景詩（万泉は盛京八景の一）からさらに光緒年間『瀋陽百詠』など近年の詩集を取り上げ、朝鮮王朝からは申濡（申叔舟七代

孫)の『瀋館録』を選んで風趣あふれる詩を紹介している。日本人の漢詩としては田岡淮海『遼東詩壇』、久保天随『遼瀋遊草』を選び、最後に父徳太郎の『木州詩存』から一首を取り上げている。朝鮮の詩人を取り上げているのは植野ならではの所作であって、『瀋館録』の原本は京城帝大附属図書館蔵という。

また、先にも触れた『満洲史文獻展覽会目録』(一九四〇年)も重要な仕事で、高句麗や渤海も含む満洲地方関連の総合的な文献目録である。

4 使朝鮮録をはじめとする中朝日文化交流史の研究

植野の研究者としての幅の広さを示すもう一つの分野は「使朝鮮録」をはじめとする中朝日文化交流史である。この分野の研究は京城帝大助手時代に開始されたもので、早期の論文「清鮮学人の佳話」(一九三三年)は、発表時期は満鉄奉天図書館時代だが、当論文によると「在漢城時代の旧稿」であるという。この論文は朝鮮の朴斉家と清の袁枚の交流、朴趾源と清の文人と交わりを『朝鮮名臣録』や袁枚『隨園詩話』、朴趾源『熱河日記』などにより発掘したもので、諸文献の版本調査にまで及んでおり、短編ながらすぐれた論考である。この論文に、

一日大学研究室に於て、素軒教授(藤塚鄰先生)より朝鮮の文人にして支那人の文集中にあらはるゝ多し、たとへば朴斉家の如き然りとの事を耳にしたれば、早速帰宅書齋裡にあり

て蔵する所の朝鮮名臣録を繙き……

といい、また、

素軒教授は朴斉家の貞蕤閣集なる写本を、一百円の大金を投じて得られたるが、その中に朴斉家懷袁枚に寄せたる詩として、次の詩を教えられた(以下、略)。

とあるのは、この分野における藤塚の教示が大きかったことを物語っている。⁸³⁾

明・董越『朝鮮賦』の研究も京城帝大時代に開始されたもので、版本の収集と調査を重ねたのち「明の董越の朝鮮賦とその異版本に就て」(一九三七年)、『稲葉博士還曆記念満洲史論叢』所載の「董越朝鮮賦考」(一九三八年)、および「董越と朝鮮賦」(一九四三年)が発表された。最後の論文は昭和十七年(一九四二年)十月、東京帝大で開かれた第十一回漢学大会学術研究発表会で発表したもので、前の「董越朝鮮賦考」を若干補訂している。董越の『朝鮮賦』は弘治元年(朝鮮成宗十九年、一四八八年)、董越が弘治帝の即位した詔を届けに朝鮮に使用した際に書いたもので、朝鮮の地理、風俗、人情、衣食住、制度などを巧みに詠み込んだ長編の賦である。

この『朝鮮賦』は一九三七年三月、朝鮮史編修会編により影印本が出ており、中村栄孝の作と思われる解説がついているが、植野はそれも踏まえつつ、いっそう包括的な考察を進めている。⁸⁴⁾

朝鮮の使臣による「燕行録」の研究は最近盛んになっているが、

中国の使臣による「使朝鮮録」の研究は緒についたばかりであり、植野のこれらの論文は現在なお参照するに足るすぐれた先駆的研究であって、近年、夫馬進が注意を喚起している。⁵⁵⁾

これに関連して「木下順庵父子と朝鮮使節」(一九二九年)は前年の「鶏林雑話」(一九二八年)を増補したもので、松田甲や市村瓚次郎、藤塚鄰らの研究に触発されて木下順庵父子と朝鮮通信使の関係をさぐっている。順庵が洪世泰に贈った七言絶句を手掛かりに順庵の次子の菊潭と趙泰億の応酬詩を多数見出すなど、たいへん興味深い。⁵⁶⁾

「魏志倭人伝に就て」(一九四一年)は先行研究をふまえ、当該伝の記述の仕方を整理したものである。

5 その他——清朝学者の研究など

さらに、清朝学者の研究がある。主に地理上の分布の面から考察したもので、これも京城帝大助手時代に着手されている。

『斯文』掲載の「清朝学者と地理上の分布」(一九二七年)のあと、『満蒙』に同名の「清朝学者と地理上の分布」(一九三二年)が載り、さらに『収書月報』に同名の「清朝学者と地理上の分布」(一九四一年)が載ったが、内容はみな違う。この作業は、先にも触れたように支偉成『支那樸学大師列伝』のデータを基礎に学者の地理的分布を出身地別に配置したもので、『斯文』論文はその方針説明のみを載せ、『満蒙』論文に至って詳細な分布表をあわせ掲

載した。しかし一九三九年、清朝の学者千二百五十二人の伝記を収めた徐世昌撰『清儒学案』二百八卷(北京・文楷齋)が刊行されたため、植野は『支那樸学大師列伝』の約三倍の人物を収めたこの『清儒学案』を活用して分布表を作ることにしたのであって、『収書月報』論文にはそうした編集方針の説明とともに、省ごとの統計が示されている。

『収書月報』論文によれば、植野は半年を費やしてこの清朝学者千二百五十二人の地理的分布表を作成し、これに画数索引、五十音索引を附した。また、いずれ機会を見て刊行したいといっているが、結局は刊行されなかったようである。『滿支典籍攷』(一九四四年)の巻末広告に「植野武雄先生著 支那学者の地方的研究」と銘打ち、『清儒学案』を活用することで編纂方法を改め、索引も附するといっており、さらに「B六版、三六二頁」と、版型・頁数まで明記されているのを見ると、すでに原稿はできあがり、書名も『支那学者の地方的研究』で決まっていたようであるが、残念ながら終戦時の混乱のため日の目を見なかったことになる。

なお、関連論文として「支那人名檢索法」(一九四一年)もある。これは人名辞書や工具書、伝記資料類など五十種の文献を紹介するとともに、その所蔵先(大連、哈爾濱、奉天の各満鉄図書館)も明記しており、中国人の人名を調べるための手引きとなっている。

さて、植野が刊行した唯一の学術書は『滿支典籍攷』(一九四四

年)である。奉天や満洲を中心とする実証的論文を集めた著作で、全三〇五頁。本稿でこれまで紹介した文章も多く収録されている。本書は奉天で終戦直前に出版されたため、日本の図書館の所蔵は多くないと思われるので、あとにその目次を附しておくこととする。

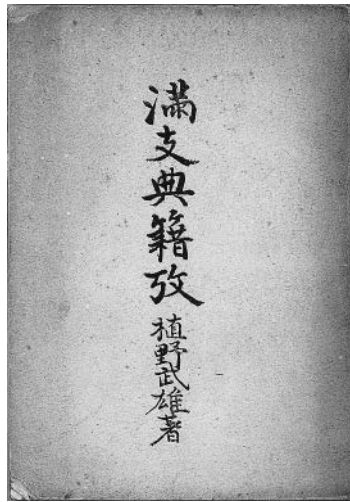


写真 8：植野武雄『滿支典籍攷』
(奉天・大阪屋号書店、1944年)

おわりに——その思想など

以上、植野武雄の生涯と業績をたどってきた。植野は図書館人として、また東洋学者として多くの功績を残した。とりわけ満洲地方を中心とする地方志や漢籍目録学、使朝鮮録を中心とする中日文化交流史の研究などはきわめて高い水準にあるといえる。では、その活動を支えた原動力はどこにあったのであろうか。最後にそのことにつき述べてみたい。

植野は漢籍のもつ魅力に惹かれ、漢籍の文化を通して日本・中国・朝鮮の親善をはかろうと考えていた。大正十三年(一九二四)、上海の東亜同文書院図書館に勤務していた、いわば駆け出しの時代にすでにこのように述べている。

吾人の痛切に感ずるものは、日支の親善ということである……少くとも我が国民及び支那国民とのあらん限り、換言せば東洋諸国が世界より滅没せぬ限り、決して忘れられぬものである。……私は日支両国民の融和を徹底的に行ふには、数千年來の相互の文学を研究し、互にこれを翻譯して又相互の戯曲、音楽、美術品を紹介し、或は交換教授を派して講演し、宣伝するにありと思ふ。(「甲子新歳を迎ふるに当りて」)

数千年にわたって蓄積されてきた中国と日本の文化に注目し、これらと比較し、相互交流を行なうことで「日支の親善」がはかれるというのである。さらに昭和七年(一九三二)、満鉄奉天図書館司書となつてまもなく、

支那に就てその実相を知るには古典即ち漢籍を究めることより始めねば支那の地理なり歴史なり思想なり国体なり国民性なりがわからない。

さればただ最新刊本のみを追ひて満洲研究の蘊奥をさわめんとしても漢籍より出発せざるものは深みがなく重みがない。うすつぺらな智識のみが得らるゝのみで、かくして得たる満洲研究は沙上に楼閣をきづくの類で根柢がないから確固たる

概念が得られない。されば私は職掌柄真に満洲を研究せんとする方には漢籍の愛読より始められんことを切望する。古典にかへれと叫ぶ次第である。(「満洲地理文献考1」)

といっている。古典・漢籍の着実な研究によってこそ中国の文化や国民性を理解することができることから、「古典にかへれ」と主張するのである。

漢籍を中心とする中国古典の研究によつてはじめて中国の特色を理解できるというのは、実は石濱純太郎がかねてから主張していたことで、「漢文にもどれ」といい、「支那に關係が出来て之を理解するのは漢学による外はない」という石濱の考え方と軌を一にしている。植野は泊園書院における石濱の受講生であつて、石濱から影響を受けていたと見て間違いあるまい。

このほか昭和八年(一九三三)の論文で、植野はそれまでの経緯を回顧して、

東都本郷の大学を巣立ちしより大陸の文化にあこがれ禹域滬上の書院に遊ぶこと三年三月、次で京阪の古都を慕ひ難波津に居を構ふること一星霜、更に鷄林漢城の大学に学ぶこと三年、縁あつて満鉄に入社しより連図を経て奉図に來り新春を迎ふること四度、この間終始漢学の一貧書生を以つて一貫したる予にとりて、殊に感を深くするは文化の上より見たる中国対朝鮮、或は中国対日本の關係の極めて密接にして又酷似せることなり。こは過去数千年の歴史の証明せる所なるが、

嘗ては滬上に遊び、今又瀋陽の地に來れる予にとりては痛切にその然るを覚ゆ。(「清鮮学人の佳話」)

と述べている。大陸の文化に「あこがれ」ていた植野にとつて、中国—朝鮮—日本をつなぐ基礎は漢籍の研究そのことにあつた。三国間の關係が密接で文化が酷似しているというのは、このような観点にもとづく説明であつた。いわば「漢字文化圏」という広がりの中で相互の文化交流を考察しようというわけで、それは古典研究を紐帯として東アジアを結びつけようとする、一見迂闊だがしかし理性的な態度をとつていた石濱と共通している。彼らはポリテイクスとは異なる別のコンテキスト——文化史的視点を持つていたのであり、そのような視点が同時代の狂信的な軍国主義や政治論、軽薄な流行に陥ることを防ぎ、東アジアの文化を共感をもつて理解しようとする意識につながつたのだと思われる。

本稿では東洋学者植野武雄について述べてきたが、その業績は今なお参照するに値するすぐれたものを含んでいる。また、生立前、実現することは難しかったが、植野が目指した理想もまた現在の我々に示唆するところがあるであろう。なお、その著述目録の編集はかつて石濱が志してかなわなかつたものであるが、ここに作成、掲載できたのもひそかな喜びとするものである。

注

- (1) 明治以降における東洋史学など跨領域の研究については鈴木俊「東洋史学」(『アジア歴史事典』第七卷、平凡社、一九六一年)、山根幸夫「東洋史学」(『国史大辞典』第十四卷、一九九三年)が基本事項を提供してくれる。近年の研究として窪寺紘一「東洋学事始——那珂通世とその時代」(平凡社、二〇〇九年)、『東アジア文化交流研究』別冊第三号「内藤湖南への新しいアプローチ」(関西大学文化交流学教育研究拠点、二〇〇八年)、高木智見「内藤湖南・近代人文学の原点」(筑摩書房、二〇一六年)、井上直樹「帝国日本と『滿蒙史』大陸政策と朝鮮・滿洲認識」(塙書房、二〇一三年)を参照。
- (2) 東方文化研究所編『昭和十五・六年度 東洋史研究文献類目』(京都印書館、一九四五年)。
- (3) 注1前掲、井上直樹「帝国日本と『滿蒙史』大陸政策と朝鮮・滿洲認識」は稲葉岩吉ら戦前の「滿鮮史」の限界や偏向を厳しく指摘しつつも、「滿鮮史的視座は一国史的史観を克服するものとして、再度、考究される余地があってもよいのではないか」(同書、二三〇頁)という。
- (4) 吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』(関西大学東西学術研究所資料集刊二十九——一、関西大学出版部、二〇一〇年)三七九頁の「植野徳太郎」の項、および吾妻「文化交流と日本の私塾および泊園書院」(『東アジア文化交流研究』第五号、関西大学文化交流学教育研究拠点、二〇一二年)、吾妻「泊園書院出身の東洋学者たち」(吾妻重二編著『泊園書院と漢学・大阪・近代日本の水脈——関西大学創立130周年記念 泊園書院シンポジウム論文集』、関西大学出版部、二〇一七年)では植野について簡単に紹介した。
- (5) 以下、植野徳太郎の年譜として「植野木州略年譜」(植野武雄編『木州詩存』所収、奉天・木州詩存刊行会、一九三九年)があり、その生涯については上述の『木州自叙伝』とこの略年譜によった。
- (6) なお、小川琢治の子が小川芳樹、貝塚茂樹(上述)、湯川秀樹、小川環樹である。
- (7) 秋山の伝記については、秋山好古大将伝記刊行会『秋山好古』(同刊行会、一九三六年)一八一―一九頁、三五―三七頁。
- (8) 注7前掲『秋山好古』三三―三頁。
- (9) 『木州自叙伝』のほか、植野武雄「受降岡碑拓に就て」(『収書月報』第二九号、一九三八年)。植野武雄『滿支典籍叢考』(奉天・大阪屋号書店一九四四年)にはこの論文のほか、冒頭に碑の写真と拓本を載せる。
- (10) 三崎麟之助(一八七八―一九三五)については、注4前掲、吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』三八二頁参照。
- (11) 注4前掲、吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』一五八頁。
- (12) 吾妻重二編著『新聞「泊園」附記事名・執筆者一覧 人名索引』(関西大学東西学術研究所資料集刊二九―三、関西大学出版部、二〇一七年)を見らるべし。
- (13) 在学中、武雄は財団法人斯文会の会員になっており、大正八年十一月の住所は、その名簿によれば牛込区市谷加賀町二ノ三二(『斯文』第一編第六号、一九一九年)。
- (14) 植野武雄「故劔西先生を懐ふ」、『斯文』第九編第十号(一九二七年)の「故岡田正之先生追悼余録」に収む。
- (15) なお、岡田正之は石濱純太郎(明治四十四年東京帝国大学文学科大学支那文学科卒)の指導教授でもあった。ただし石濱は岡田とは「しっくりいかなかった」という。吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集』(関西大学出版部、二〇一〇年)一八四頁。
- (16) 中見立夫「衛藤利夫と『韃靼』——戦前期中国東北地方における図書館と図書館人」(衛藤利夫『韃靼』、中公文庫、中央公論社、一九九二年、解説)二八八頁。
- (17) 徳太郎によれば、当時、東亜同文書院の院長は大津麟平(一八六五―一九三九)で、武雄の就職は騎兵中佐・寺中猪介の仲介によるという。ただし、大津が院長になったのは大正十二年(一九二三)三月で

あるから、記憶違いがあるかもしれない。『東亜同文書院第学史——創立八十周年記念誌——』（大学史編纂委員会、社団法人滬友会、一九八二年）一一二頁。

(18) 前注の『東亜同文書院第学史——創立八十周年記念誌——』一一二頁。

(19) 植野武雄「燕京訪書行」（『収書月報』第五九号、一九四〇年）。

(20) 中西利八編纂『滿洲紳士録』第三版（滿蒙資料協会、一九四〇年、『滿洲人名辞典』上巻、日本図書センター、一九八九年影印）「植野武雄」。

(21) 斯文会の会員名簿によれば、大正十四年十一月の植野の住所は和歌山市洲崎町二（『斯文』第七編第六号、一九二五年）。

(22) 注12前掲、吾妻重二編著『新聞「泊園」附記事名・執筆者一覧人名索引』第一号（昭和二年十二月）。

(23) 李曉辰「京城帝皇大学の韓国儒教研究——「近代知」の形成と展開」（勉誠出版、二〇一六年）。

(24) 注9前掲『滿支典籍攷』の巻末広告によれば、植野はこの論文を大幅に増補するとともに索引を加えた書物の出版を予定していた（後述）。

(25) 通堂あゆみ「京城帝皇大学法文学部の再検討——法科系学科の組織・人事・学生動向を中心に——」（『史学雑誌』第一一七編第二号、二〇〇八年）。

(26) 李曉辰「京城帝皇大学文科助手会と会報『浮海』（『東西学術研究所紀要』第五〇輯、二〇一七年）参照。このほか、「紺碧遙かに——京城帝皇大学創立五十周年記念誌」（京城帝皇大学同窓会、一九七四年）一八七頁にも植野の業績が簡単な紹介されている。

(27) これは佐竹義継の仲介によるもので、『木州自叙伝』によれば、佐竹は明治三十四年から徳太郎の書生となっている。佐竹はのち、滿鉄図書館草創期の基礎を築く図書館員となった。岡村敬二「遺された蔵書——滿鉄図書館・海外日本図書館の歴史」（阿吡社、一九九四年）六〇頁。植野が滿鉄図書館司書に就職したのも、佐竹の支援があったに違いない。

(28) 「収書月報」の奥付の「編集人 植野武雄」の住所による。

(29) 注20前掲、中西利八編纂『滿洲紳士録』第三版「植野武雄」。

(30) 中西利八編纂『滿洲紳士録』第四版（滿蒙資料協会、一九四三年、日本人物情報大系第十五巻、皓星社、一九九九年影印）「植野武雄」。

(31) 以下、滿鉄の図書館については、注16前掲の中見立夫論文、注27前掲の岡村敬二論考、大場利康「滿洲帝皇国立中央図書館籌備処の研究」（『参考書誌研究』第六二号、国立国会図書館、二〇〇五年）、『彷彿月刊』第四巻第六号「特集 滿鉄図書館」（一九八八年）を参照した。

(32) 注27前掲の岡村敬二論考、二二頁。

(33) 彌吉光長「東北地方（旧滿洲）図書館の回顧史」（『彌吉光長著作集』第二巻、図書館史・読書史、日外アソシエーツ株式会社、一九八一年）八三頁。

(34) 前注、彌吉論文、八四頁。

(35) 緑蔭書房からその復刻版が出版されている。日本植民地文化運動資料1『復刻版 滿鉄大連図書館「書香」』全八巻・別冊（一九九二年）、同3『復刻版 滿鉄奉天図書館「収書月報」』全八巻・別冊（一九九三年）、同2『復刻版 滿鉄哈爾濱図書館「北窗」』全五巻・別冊（一九九三年）。いずれにも解題がつき、有益である。

(36) 『滿洲学報』第一号（一九三二年）「滿洲学会の創立並に現況」。なお『滿洲学報』は一九四四年三月の第八・九号まで続いた。

(37) 注9前掲、植野武雄『滿支典籍攷』自序、福田實「滿洲奉天日本史」（謙光社、一九七六年）第十章「図書館および学術研究」。

(38) なお、滿洲学会は昭和十六年（一九四一）、事務所を新京（現・長春市）の国立中央図書館籌備処内に移している。国立中央図書館籌備処とは滿洲国に国立図書館を設立するための準備部署である。この時点での学会の主な理事には杉村勇造、瀧川政次郎、衛藤利夫、黒田源次、松浦嘉三郎らがあり、常任理事は柿沼介がつとめた。さらに幹事として植野のほか、彌吉光長、山崎与四郎、島田好ら籌備処関係者が名を連ねている。『資料公報』第二巻第二号（国立中央図書館籌備処、一九

- 四一年)の「滿洲文化學術団体紹介」。また注31前掲、大場利康論文、一七一頁の注147参照。
- (39) 植野武雄「燕京訪書行」(『収書月報』第五十九号、第六十一号、一九四〇—一九四一年)。
- (40) 関西大学東西学術研究所蔵。
- (41) 注35前掲、「復刻版 滿鉄奉天図書館『収書月報』小黒浩司解題。
- (42) 注31前掲、「叢書月刊」第四卷第六号所収の石堂清倫「滿鉄の図書館」。
- (43) 原田勝正『増補 滿鉄』(日本經濟評論社、二〇〇七年)二四一頁以下。
- (44) 注31前掲、「叢書月刊」第四卷第六号所収の大谷武男「大連図書館の終焉とその後」。
- (45) 丸澤常哉『新中国建設と滿鉄中央試験所』(二月社、一九七九年)三二頁以下。なお、この科学研究所は一九四九年一月、大連市に移管された。
- (46) 柿沼介「剩語」(剩語刊行会、一九七二年)巻頭の「略年譜」、「柿沼介先生略歴」(『図書館雑誌』五七—一〇、一九六三年)。
- (47) この目録はその後、和歌山県立図書館編『倉田續先生蔵書目録』(一九五一年)として刊行された。その序言に「書目編纂の衝にあたられたのは、元滿鉄奉天図書館司書植野武雄氏であるが、不幸業半ばにして病のために急逝せられた。次で湯川貢氏がその任にあたられた」という。
- (48) 「奉天図書館名著解題」五点はいずれも衛藤の著で、次のとおり。『ピントの東洋旅行記』『衛匡国の鞆鞆戦記』『南懐仁の滿洲紀行』(以上、一九三〇年)、『李明の支那記』『露西亞の極東経略遡源』(以上、一九三一年)。
- (49) 『鞆鞆』は昭和十三年(一九三八)四月、滿鉄社員会出版。ついで同年七月、朝日新聞社出版。戦後の昭和三十一年(一九五六)、他の主要著作をほとんど収録した『鞆鞆——東北アジアの歴史と文獻』が衛藤利夫記念事業会より刊行された(戦後版『鞆鞆』)。
- (50) 注16前掲、中見立夫「衛藤利夫と『鞆鞆』——戦前期中国東北地方における図書館と図書館人」三〇六頁および三一〇頁。
- (51) 『収書月報』第七十四号(衛藤館長退任記念特輯号、一九四二年)所収。前注の戦後版『鞆鞆』にはこれを増補した故植野武雄原編・中村道岡補「衛藤利夫著述目録」を載せる。
- (52) 注35前掲、「復刻版 滿鉄奉天図書館『収書月報』小黒浩司解題にも「同館のコレクションで特筆すべきは、欧米人の東洋学研究書、中国東北地区の地方志などの充実で、世界的にも有名であった」という。
- (53) 植野武雄『滿洲・支那地方志概観』(滿鉄調査部奉天図書館、特別資料第1号、一九四二年)一一頁。
- (54) 原覚天「衛藤利夫——滿蒙史研究」(原『アジア研究と学者たち——覚天交遊録』、勁草書房、一九八五年)。原は戦後、アジア經濟の代表的研究者として活躍した。
- (55) 注9前掲、植野武雄『滿支典籍攷』自序。
- (56) 植野武雄「一貫の道」(『収書月報』第七四号、衛藤館長退任記念、一九四二年)。
- (57) 注9前掲、植野武雄『滿支典籍攷』自序。
- (58) 注27前掲、岡村敬二論考、六六頁以下、注35前掲「復刻版 滿鉄奉天図書館『収書月報』小黒浩司解題。
- (59) 『全滿二十四図書館共通 滿洲関係と漢書件名目録』(南滿洲鉄道株式會社編、大連・右文閣、一九三二年)衛藤利夫序。
- (60) 衛藤利夫「文潮閣の危機」(『図書館雑誌』一九四三年三月)、注16前掲、衛藤利夫『鞆鞆』七三三頁以下。
- (61) 『書香』第三三号(一九三二年十一月)。
- (62) 植野武雄「文潮閣四庫全書に就て」(『斯文』第一九編第七号、一九三七年)。
- (63) 前注の植野「文潮閣四庫全書に就て」、「文潮閣四庫全書要略及索引」(国立奉天図書館、一九三八年)口絵および一一頁。
- (64) 植野は四庫全書保全につき「今日の滿洲国立奉天図書館の前身であ

- る張学良邸に松崎柔父先生と接收整理に参り」といつている。(注9前掲、植野武雄『満支典籍放』自序、三頁)。なお、康徳六年(一九三九)六月、文潮閣四庫全書は新京(現・長春市)に設けられた国立中央図書館籌備処の管轄に入り、戦後、中華人民共和国に引き継がれた。
- (65) この金毓黻による『文潮閣四庫全書提要』は近年、中国から二度影印されている。一つ目は『金毓黻手定本文潮閣四庫全書提要』二冊(一九九四年、中華全国図書館文献縮微複制度中心、一九九四年)、二つ目は『文潮閣四庫全書提要』全六冊(北京・中華書局、二〇一四年)である。
- (66) 吾妻重二『統修四庫全書』と四庫関連叢書(吾妻『宋代思想の研究』所収、関西大学出版部、二〇〇九年)参照。
- (67) この第三十一回全国図書館大会については、『図書館雑誌』第三一一年第八号(第二二三号、一九三七年)が「大会総会号」を組んで詳しく報じている。
- (68) 福田宏一については泊園書院の門人録『登門録』の大阪市東区にその名が見える。注4前掲、吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集—泊園書院資料集成1』四五〇頁下段。植野「福田本」について「福田を『町人学者』とし、当文庫が『満鉄大阪事務所』の配慮により寄贈されたこと、『福田本日録』の中に藤澤南岳『大学家説』を含むことなどから、泊園門人に間違いない。おそらく、植野が泊園関係者であったことから福田の蔵書が寄贈されたのであろう。このほか新聞『泊園』新第二十五号(一九三七年一月)に、その訃報が「福田宏一氏は十一月二十九日急逝さる。同氏は有名なる支那通を以つて、識者間に重んぜらる。当日支問題多事の際、氏の訃音は痛惜に堪えず」と述べられている。注12前掲、吾妻重二編著『新聞「泊園」—附記事名・執筆者一覧 人名索引—泊園書院歴史資料集3』一九二頁。
- (69) 「石本文庫目録」(『収書月報』第七三号、一九四二年)参照。
- (70) 「小平文庫の整理を終へて」(『収書月報』第八〇号、一九四二年)。
- (71) 東方文化研究所編『昭和十五・六年度 東洋史研究文献類目』(京都印書館、一九四五年)。
- (72) 注9前掲、植野武雄『満支典籍放』自序。
- (73) 田村実造・小林行雄『慶陵』第一卷(座右宝刊行会、一九五三年)はしがき、一九一頁以下。
- (74) 金毓黻については霍明琨『東北史壇巨擘金毓黻(静晤室日記)研究』(黒龍江大学出版社、二〇一三年)、毛利英介『満洲史と東北史のあいだ—稲葉岩吉と金毓黻の交流より—』(関西大学東西学術研究所紀要)第四八集、二〇一五年)参照。
- (75) なお、金毓黻は一九三六年七月、日本を経由して上海に亡命したあと南京中央大学史学系教授、ついで同大学文学院長となる。戦後、北京大学教授。
- (76) 注56前掲、植野武雄「一貫の道」、注37前掲、福田實『満洲奉天日本入史』二〇七頁。
- (77) 園田一亀については、原直史「園田一亀と歴史研究—ある在「満洲」日本人の言論軌跡に関するノート」(『環日本海論叢』第一七号、新潟大学環日本海研究会、二〇〇〇年)参照。
- (78) このほか、昭和十八年七月、満洲学会の主催する座談会「永尾龍造氏に話を聴く」にも植野は出席している。『満蒙』第二四年第九号(通巻二八一号、一九四三年)。
- (79) 『収書月報』第三十七号(一九三九年)に同名の「満洲地方志綜合目録」が掲載されており、それを満洲学叢刊として単行出版したもの。『収書月報』同号の編輯雑記にも「満洲地方志綜合目録」につき「この貴重な目録は更に『満洲学叢刊』第二冊として発行することになつてゐる」という。
- (80) 植野武雄「瀧川博士の泉石書屋蔵満洲地方志目録(上)」を讀む(一九四二年)、注9前掲、植野『満支典籍放』自序。
- (81) 京都大学人文科学研究所編『昭和十七・八年度 東洋史研究文献類目』(全国書房、一九四九年)。
- (82) 倉石武四郎述『目録学』(東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献セ

志は大陸にあつたから一年にして朝鮮に渡り、京城大学法文学部に助手となり素軒藤塚鄰教授の指導を受くることゝなつた。その間の研究の片鱗は「清鮮学人の佳話」として「朝鮮」第二百十三号に見られる。居ること又三年にして南満洲鉄道株式会社に入り大連又奉天の図書館に勤務した。満鉄図書館の漸く活躍する時に當つているので君の努力も尋常ならざるものがあつたようである。満鉄図書館の報告雑誌たる奉天の「収書月報」だの大連の「書香」だのが学界の注目受くるに至つたが、先生の筆になる紹介報告論文も続々と掲載されて先生が単なる図書館の事務員以上の人であることを示している。地方志研究は満洲を主題として創始の榮を世に認められた。自らも満洲方志総目提要の完成を期していた朝鮮文化交流の研究には明の董越の朝鮮賦に力を尽して数次の発表がある。漢籍分類の方法四庫全書中心たるべきを論じて学界の是認を得た。先生が序文に於て発したる図書館による中日親善は本論にはいつたわけであつた。満洲に於ける成績の大概は「満支典籍攷」、「支那学者の地方的研究」に集録されている。満鉄図書館の活動に沿つて満洲学会も結成され、「満洲学叢刊」、「満洲学報」などが続々と出で、内地学界を刺激したが、君の努力も大きかつたと推想される。其頃の内地学者の大陸に遊ぶものは殆ど皆君の応接に与らないものはなく、終に其機を得るに至らなかつた僕は帰朝の諸先生から君の噂を聞くのみであつたのは今にして遺憾極まりない。

終戦後は大連に留り、中長鉄路公司、科学研究所、中央図書館上級司書、兼同経済調査局調査員（人文地理）として勤務し、多年の感慨を残して昭和二十二年二月に引揚げ帰還した。舞鶴に帰着して故郷の家も戦災に遇い万巻の蔵書も煙散したるを知つたのであつた。久し振りの父子対面に木州先生は「戦後戦前長別離、相逢楞看二毛滋、壮時顔色今何在、纔藉声音認我児」の一絶を君に示されたと言うが、僕も亦来訪を受けた時に同様の感を催うしたものだ。然し幸い君の好学の心は少しの衰えもなく、終戦姿の雑囊から古本を取出しては僕に見せたものである。

藤沢黄坡先生の紹介によつて同じ四月から関西大学へ講師として支那文学を講ぜられる事となつてからは同僚として屢々会談するの機を得たが、困苦の現下にも好書の風あるに敬服した。二十三年四月からは三尾高等学校教諭をも兼ね、同校の出版物には君の筆になる趣味ある随筆が見られた。今年八月には和歌山県立図書館の臨時事務嘱託として県教育委員会の寄託した和歌山の碩学倉田績先生の遺書整理を手伝い、其中から泊園の藤沢東暎先生の遺筆が出てきたと報ぜられ、僕も共に一覽の機を得たいものと思わしめられたものだ。九月上旬になつて三尾高校でのプリント「寒雨連江夜入呉に就て」を贈られた。これは先頃我等の静安学社例会で承つたものだがその熱心を見るべきである。

然るに関大も始まつて間もない九月二十七日に経商学部で僕は君が昨二十六日午前一時半急逝と知つたのであるから驚ざるを得

なかつた。去年一度軽度の脳溢血にはあつたのではあるが、其後の健康さかゝる早急の変予想もせしめなかつた。関大への遠路の出講、倉田遺書整理の励精、それらも考えられるが、君の熱心さから見れば当然であつて余り苦痛とも感じなかつたのではない。戦禍はかくして君の生涯の結論を余りにも簡単に完結せしめ去つたのだろう。老いたる僕をして君の弔伝を書かしむる如きは世の惨事である。令嗣珪君今京大に東洋史を学ぶ。恩師那波誠軒博士は君と旧がある。悲報を得て一詩を贈つて弔せられた。

潜心經史努多年 遼左奉官司簡篇

戰禍一朝違宿志 風塵孤劍了前緣

歸來授業家鄉學 仰止追蹤唐宋賢

驚悼溘然捐館舍 空留遺籍入九泉

木州先生これに次韻して曰く

己丑纔過知命年 終身事業友陳篇

不料遭遇風塵變 豈了纏綿父子緣

東壁府中常貴聖 西京城裏永師賢

今朝奠得誠軒句 吟誦余音達九泉

一吟の下千万の感をなさざるを得ない。不文の僕は次するを得ざるを遺憾とする。

君のビブリオグラフィは珪君と共に之を編纂して他日世に遣らうと思つている。

以上の如き弔伝を綴つて本誌へ送つておいたのであるが、発行

の遅延している間に令嗣珪君はアルバイトの多忙に拘らず今春三月立派に京大文学部東洋史学科を卒業し、卒業証書を靈前に供えて報告して、父君の之を見るを得ざるを歎じたが、長く膝下に養育を受けた祖翁の猶お健にしてこの栄を賞せらるゝを喜んだのであつた。然るに、木州先生はこれに安心せられたか何事ぞ日もあまりたゝない四月九日には溘然として道山に帰せられた。重なる不幸に直面した令嗣の顔前に僕は弔辞も半ば声を呑んだ。聞けば故將軍は予期せられたのか既に昨秋に辞世の一首を窃かに撰していられたと云う。

不敢尤人不怨天 一朝大悟謝塵緣

想起八十年間事 半似浮雲半似煙

本誌発行の遅延を幸いとして之にこの両事を追記しておく。悲運の令嗣の将来の幸多からんことを切に祈るばかりである。論著目録を附し得なかつたのは僕の罪である。

【附・植野武雄著述目録】

- 1) 「※満支」は植野『満支典籍攷』に所収のもの。ただし、同書所収に際して大幅な増補改訂をほどこしている場合あり。
- 2) 植野『満支典籍攷』の目次も附した。

著書

- ・『満洲地方志考』植野武雄著、奉天図書館叢刊第25冊、満鉄奉天図書館、1935年10月、全16頁
- ・『第三十一回日本図書館大會記念展覧資料目録』植野武雄編、奉天：満鉄奉天図書館、1937年6月、全26頁
- ・『満洲地方志綜合目録』植野武雄著、満洲学叢刊第2冊、奉天：満鉄奉天図書館、1939年2月、全24頁
- ・『木州詩存』植野武雄編、線装本、藤澤章（黄坡）跋、奉天：木州詩存刊行会、1939年8月、全92葉
- ・『奉天を詠じた漢詩集』、「書物同好会冊子」第10号、京城、1940年4月 ※満支
- ・『満洲史文献展覧会目録』植野武雄編輯、奉天：満鉄奉天図書館、1940年11月、全23頁
- ・『満洲・支那地方志概観』植野武雄著、満鉄調査部奉天図書館、特別資料第1号、1942年8月、全28頁 ※満支
- ・『本館所蔵小平文庫目録』、植野武雄編輯、満鉄奉天図書館、1942年11月、全34頁
- ・『満支典籍攷』植野武雄著、奉天・大阪屋号書店、1944年3月、B6判、全305頁
- ・和歌山県立図書館編『倉田績先生蔵書目録』、和歌山県立図書館、1951年5月、全63頁 *もと植野の整理による

論文

- ・「甲子新歳を迎ふるに當りて」、『斯文』第6編第1・2号（1924年4月）56～60頁
- ・「對支文化事業に對する一家言」、『斯文』第6編第6号（1924年12月）42～46頁
- ・「故岡田正之先生追悼餘録 故劍西先生を懷ふ」、『斯文』第9編第10号（1927年10月）38～40頁
- ・「清朝學者と地理上の分布」、『斯文』第9編第12号（1927年12月）768～772頁
- ・「鶏林談叢」（一）、『北京週報』第276号（極東新信社、北京、1927年10月） *署名は「植野生」
- ・「鶏林雜話」、『文字同盟』第10号（文字同盟社、北京、1928年1月）31～37頁
- ・「迷嶺山娘娘廟碑記考」、『亞東』第6卷第9号（亞東印画協会、大連、1929年9月）14～17頁 ※満支
- ・「木下順庵父子と朝鮮使節」、『朝鮮』第174号、1929年11月号）68～76頁 *肩書：大連図書館
- ・「清朝學者と地理上の分布」、『滿蒙』第12年8月号附録（通卷136号、1931年8月）1～26頁
- ・「四庫全書に就て」、『書香』32号（1931年11月）1～2頁
- ・「満洲地理文献考(1)」、『書香』34号（1932年1月）1～2頁
- ・「満洲地理文献考(2)」、『書香』36号（1932年3月）1～2頁
- ・「満洲地理文献考(3)」、『書香』38号（1932年5月）2～4頁
- ・「満洲地理文献考(4)」、『書香』43号（1932年10月）1頁 ※満支「盛京通志異本攷」
- ・「満洲地理文献考(5)」、『書香』44号（1932年11月）、1～2頁 ※満支「盛京通志異本攷」
- ・「九連城に關する文献(日清役以前)に就て——(未定稿)」、『書香』47号（1933年2月）1～2頁
- ・「清鮮學人の佳話」、『朝鮮』第213号、1933年2月号）73～77頁 *肩書：奉天満鉄図書館
- ・「奉天の生んだ兩叢刊に就いて1」、『書香』48号（1933年5月）1～2頁
- ・「萃升書院と萃升書院叢刊 奉天の生んだ兩叢刊に就いて(2, 完)」、『書香』50号（1933年7月）

2～3頁

- 「支那學者ノ地方的研究 其一：清朝學者ノ地理上ノ分布改訂版刊行ニ際シテ」植野武雄著、『図書館研究：青年図書館員聯盟機関誌』16-1(61)（大阪：青年図書館員聯盟、1933年）
- 「滿洲地方志考」、『学海』第2輯（1935年）72～87頁 ※滿支「盛京通志異本攷」
- 「奉天文溯閣四庫全書に就て」、『図書館雑誌』第31年第5号（第210号、1937年5月）137～139頁、152頁
- 「文溯閣四庫全書に就て」、『斯文』第19編第7号（1937年7月）12～21頁 ※滿支
- 「明の董越の朝鮮賦とその異版本に就て」、『書香』98号（1937年8月）3頁
- 「續修四庫全書總目考」、『収書月報』22号（1937年11月）31～35頁 ※滿支
- 「蘇州方志考」、『収書月報』26号（1938年3月）4～8頁
- 「奉天通志に就て」、『収書月報』28号（1938年5月）2～3頁 ※滿支
- 「受降岡碑拓に就て」、『収書月報』29号（1938年6月）2～4頁 ※滿支
- 「董越朝鮮賦考」、『稲葉博士還曆記念滿鮮史論叢』（京城：稲葉博士還曆記念会、1938年6月）所収
- 「本館架藏 北支五省地方志簡目」、『収書月報』30号（1938年7月）2～10頁
- 「萃升書院に就て」、『奉天日日新聞』1938年9月13日 ※滿支
- 「滿洲地方志綜合目録」、『収書月報』37号（1939年2月）2～25頁
- 「清儒学案 徐世昌等著」、『収書月報』50号（1940年3月）卷頭
- 「永吉縣志」、『収書月報』51号（1940年4月）卷頭 ※滿支「永吉縣志に就て」
- 「龍と滿洲の地名」、『滿蒙』第21年8月号（通卷244号、1940年8月）60～65頁 ※滿支
- 「燕京訪書行」、『収書月報』59号（1940年12月）19～24頁
- 「巳歳に因みて——蛇に就ての文献」、『奉天毎日新聞』1941年1月 ※滿支
- 「燕京訪書行」、『収書月報』60号（1941年1月）7～11頁
- 「燕京訪書行」、『収書月報』61号（1941年2月）2～9頁
- 「魏志倭人伝に就て」、『滿蒙』第22年第3号（通卷251号、1941年3月）64～71頁
- 「清朝學者と地理上の分布」、『収書月報』67号（1941年8月）12～17頁
- 「奉天圖書館受贈「福田本」に就て」、『収書月報』69号（1941年10月）28頁 著者名は「竹城生」 ※滿支には「明版天目中峯和尚廣録」として収む
- 「福田本目録」、『収書月報』69号（1941年10月）29～39頁
- 「支那人名檢索法」、『書香』133号（1941年10月）1～8頁
- 「漢籍に就て」、『資料公報』第2卷第10号（1941年10月）1～6頁 ※滿支
- 「石本文庫目録」、『収書月報』73号（1942年2月）21～28頁 末尾に植野「石本文庫の整理を終へて」あり
- 「一貫の道」、『収書月報』74号（衛藤館長退任記念特輯号、1942年3月）「館員の記—衛藤館長を送る—」43～43頁
- 「著述目録」、『収書月報』74号（衛藤利夫の著述目録）53～56頁
*「衛藤利夫著述目録」故植野武雄原編、中村道岡補、衛藤利夫『韃靼—東北アジアの歴史と文献—』（東京：衛藤利夫記念事業会、1956年）813～816頁。もと『収書月報』74号所収。
- 「大陸事情—永尾龍造先生の業績—」、『収書月報』76号（1942年5月）4～7頁
- 「滿洲の地名に就て」、『収書月報』79号（1942年8月）13～16頁
- 「小平文庫の整理を終へて」、『収書月報』80号（1942年9月）15頁
- 「奉天の今昔を語る」、『滿洲日々新聞』1942年9月1日より9回連載 ※滿支
- 「瀧川博士の泉石書屋藏滿洲地方志目録(上)」を読む、『収書月報』81号(1942年10月)16～19頁
- 「董越と朝鮮賦」、彙報、第十一回漢学大会學術研究発表会記事、『斯文』第24編第12号(1942年12月)

- 「董越と朝鮮賦」、『斯文』第25編第5号（1943年5月）19～26頁 ※満支
- 「漢籍分類法變遷史」、『収書月報』88号（この号は「竹城植野武雄主任の離任を記念して」と題される、1943年5月）17～35頁 ※満支
- 「永尾龍造氏に話を聴く（座談會）」、主催：満洲学会、出席者：植野武雄ら、『満蒙』第24年第9号（通巻281号、1943年10月）39～45頁
- 「特別購入による貴重漢籍類に就て」、『書香』16巻2号（155号、1944年3月）70～79頁

『満支典籍攷』（奉天・大阪屋號書店、全305頁、1944年3月）目次

自序

盛京通志異本攷

奉天通志について

永吉縣志について

満洲・支那地方志概観

文溯閣四庫全書に就て

續修四庫全書總目攷

漢籍に就て

漢籍分類法變遷史

萃升書院に就て

奉天を詠じた漢詩集

受降ヶ丘碑拓に就て

迷鎮山娘々廟碑記考

龍と満洲の地名

巳歳に就て

明版天目和尚廣録

董越と朝鮮賦

奉天の今昔を語る

UENO Takeo and his Oriental Studies Including a Bibliography of his Works

AZUMA Juji

Takeo UENO (1897-1949) was an Orientalist who graduated from 'Hakuen-shoin', a famous private academy of classical Chinese studies in Osaka. Ueno achieved much, both as a scholar and a librarian. His work in the areas of local history of the Manchu region, Chinese bibliography and the history of cultural exchange between China, Korea and Japan based on the Shi-Chousen-Roku records were all at an extremely high level and exemplify how he spearheaded progress at the forefront of these fields in both China and Japan.

Unfortunately, there has been a complete lack of prior research focused on Ueno. In this paper, I examine Ueno's life and achievements in detail as a pioneer of cultural interaction studies in East Asia. Appended is a bibliography of all his known works.

キーワード：満鮮史 (Manchuria-Korea History)、満鉄奉天図書館 (Houten Library of Mantetsu)、衛藤利夫 (ETO Toshio)、泊園書院 (Hakuen Academy)、石濱純太郎 (ISHIHAMA Juntaro)